

在米ロシア人移民労働運動史研究ノート（2）

山内, 昭人
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/24704>

出版情報：史淵. 149, pp.31-78, 2012-03-09. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院人文科学研究院
『史淵』第149輯 2012年3月刊行

在米ロシア人移民労働運動史研究ノート(2)

山 内 昭 人

在米ロシア人移民労働運動史研究ノート（2）

山内 昭人

ま え が き

- 1 在米ロシア人移民史概観
 - 2 在米ロシア人移民労働者の世界
 - 3 ロシア語新聞報道にみる在米ロシア人の意識
 - 4 逮捕・国外追放者にみる在米ロシア人労働者像（以上、第148輯）
- 補章 ロシア人労働者同盟
- 5 在米ロシア人コロニー統一の試み（以上、本輯）

補章 ロシア人労働者同盟

前章（第4章）後半で考察したロシア人労働者同盟について、脱稿後ワシントンD.C.の国立公文書館で史料調査した結果、新たな知見を得たので補章を設けロシア人労働者同盟（以下、URWと略記）に関する補足説明を行うことにする。具体的には、前章で主に司法省捜査局特別捜査官スピアの1919年4月8日付報告によってURWの歴史を紹介したが、ここでは新たに発見した同年11月6日付「〔司法長官特別補佐官〕フーヴァー氏〔への〕覚書」⁽¹⁾などをもとにまず、前章での説明の補正を行う。

同「覚書」によると、1907年にURWはニューヨークで組織され、それにシャトフによって指導された11名のロシア人アナーキストが参加し、そしてこのグループによって『ゴーロス・トゥルダー』（*Голос Труда*）が同年刊行された。その定期刊行物は約6カ月間続いたあと郵政省によって郵送を禁じられたが、しかしそれが存在する間に必要なプロパガンダに成功し、その結果、1908年にニューヨークで大会が開催され、大会を前に約400名のメンバーをもつ13支部

から成っていた組織は永続的な形態を取った。

前章で併記した組織化の年としての1908年と1907年のずれについては、「覚書」によって補正されうるように思える。すなわち、URWは1907年に組織され、1908年に中心組織体を持つに至った、と。

残るは『ゴーロス・トゥルダー』創刊の問題だが、アムステルダム の社会史国際研究所(ミネソタ大学移民史研究センターも)所蔵の『ゴーロス・トゥルダー』の創刊号は、1911年3月1日に出されており、副題は「在米ロシア人労働者無党派機関誌」で、「ニューヨークにおけるロシア人労働者グループの出版」となっている。そのロシア人労働者グループ(書記はローデ-チェルヴィンスキー)は、1910年10月に組織され、直ちにロシア人労働者クラブ創設のための煽動をニューヨークのロシア人コロニーの中で着手したとある⁽²⁾。これとは別の機関誌がすでに1907年か1908年に出ていたかは確認できない。

なお、1911年の創刊号の付録にある『「ニューヨークにおけるロシア人労働者グループ」の綱領および規約』をみると、各メンバーの入会金は1ドル、毎月の会費は50セントで、その上、設立された新聞基金に各メンバーが入会后6カ月間に5ドル以上を納入することとあり、最盛期URWの毎月の分担金10セント(前篇58頁)と比べてはるかに物入りで、当時、労働者大衆が容易に入会しうる状況ではなかったであろうことが窺われる。

この創刊号および1910-11年の情報を司法省捜査局が得られなかったのは、URWが捜査対象になるのが遅れ、ようやく1919年2月までに捜査局ニューヨーク事務所が潜入捜査を開始したことが響いていたからであろう⁽³⁾。

そのあと続く「覚書」の概括的な記述を抜粋しておく、URWの大会がおおよそ1年に1度開催され、時おり地域大会が招集された。その地域ではさまざまな支部が鉱山、商店、工場、伐採搬出飯場、製材所などのロシア人移民労働者の中で組織され、そしてそのプロパガンダが文献、新聞、講演によって行われ、講演者は中央組織から派遣された。

次に、前篇52頁で共産主義者とURW員の逮捕者のうち国外追放率が後者が前者の3倍以上であったことについて補足説明をしておく。

原史料によってデータを改めて挙げておくと、1919年11月1日から1920年4月24日までの半年間で発行された令状総数は6,350である。うち国外追放命令を受けたのが762で、令状総数の12%にあたり、実際国外追放されたのが約3分の1の263で、令状総数の4.1%にすぎない。その中でアナキスト、URWと共産主義者等との取り扱いには顕著な差があり、令状が取り消されたのがURWでは61に対して、共産主義者等では1,232と20倍にもものぼる⁽⁴⁾。後者の取消が極端に多いのは、老革新主義改革家で1913年以来労働省次官を務めていたポスト（L.F. Post）が担当し、司法省の圧力に屈せず、裁判のために「意識的メンバー」であったかどうか（前篇54頁参照）の判定を証拠にもとぎ厳密に行ったからである⁽⁵⁾。危険人物が共産主義者以上にURW員に実際多かったというわけでは必ずしもない。

なお、シュミットの新研究によれば、「レッドスケア」を機にフーヴァー率いる司法省捜査局は、一連の襲撃・逮捕・起訴を主導し、大量の国外追放をめざす裁判の職務を移民局をかかえる労働省から奪い、管轄しようとした。そこには捜査局の政治的監視活動の制度化のために連邦政府内の権力の集中が意図されていたのであり、その意味で「レッドスケア」は仕組まれていたという側面も見逃しえない⁽⁶⁾。

最後に、前章では1919年1月10日の「最後の」大会までを紹介したが、その第5回大会以降のURWの動きを、第一次史料をもとに具体的に追っていく。

1919年2月26日、URW連盟より機関誌『パンと自由』（*Хлеб и Воля. Еженедельный орган Федерации Союзов Русских Рабочих Соед. Штатов и Канады*; 1903年ジュネーブで創刊されたロシア・アナキスト運動の最初の雑誌名に因んだ）が創刊された。それは1918年に廃刊された『ナバート〔警鐘〕』の後継誌であり、それまでの間、同連盟員は自らの代弁者としてニューヨーク市で刊行されていた合州国およびカナダ労働者代表ソヴェト（第5章参照）の日刊紙『労働者と農民』（*Рабочий и Крестьянин. Ежедневная газета советов рабочих депутатов Соединенных Штатов и Канады*; 後述）を利用してきた⁽⁷⁾。

ラスク委員会報告書にもとづく記述では、『パンと自由』の発行部数は4,500

部で、編集者兼マネージャーとして3名が挙げられている。すなわち、ロシア-イタリア系アナキスト指導者のビアンキ (P. Bianki)、編集者を努めたステパヌク (N. Stepanuk)、何でも屋で編集も兼ねた寄稿者であったクラヴチュク (P. Kravchuk) であり、3名とも1919年12月に「ビュフォード」号で国外追放されることになる⁽⁸⁾。同誌はそれを待たず、1919年11月6日の37号をもって停刊したとのことである⁽⁹⁾。

ニューヨークの捜査官 (で直後にラスク委員会の主任調査官となる⁽¹⁰⁾) フィンチ (R.W. Finch) の1919年4月2日付報告によれば、上記第5回大会で採択された決議に則して集会が少なくとも3週間に一度開催されなければならない、そのため4月12日午後4時に地域会議を開催する、とビアンキの署名でURW宛通知文が発された。開催地はニューヨーク市の人民の家であり、6つの議事日程のうち、1番目、2番目、4番目は、それぞれ「連盟書記局の見直しについて」、「連盟の文献の出版について」、「ボリシェヴィキ大使への-----^(ママ) [関係?] について」であった。

当のビアンキは国外追放のために拘束されており、翌4月13日URW連盟主催のブルックリンの集会では、彼のための保釈金1,000ドルが集められた [すぐに保釈金の額は2,500ドルに跳ね上がる]。その時、ビアンキを引き継いで連盟書記を務めていたのは、オハイオ州クリーヴランドで活動し当地へ移って来ていたペルクス (H. Perkus) であり、彼は『パンと自由』の編集者でもあった⁽¹¹⁾。

この1919年4月までURWの活動は継続的であり、むしろ拡大傾向にあったことは、入会者の増大で見てとれる。そのことを、司法省捜査局が (おそらく1920年初めに) 押収した2種類 (うち1つは途中欠落) のニューヨーク市のメンバー・リストで見えていくことにする⁽¹²⁾。

リストの通し番号は237だが、氏名が異なる番号重複が3、氏名に番号なしが1、そして別番号で再入会している者が1 (退会による削除者は当人を含めて3) で、計240名がメンバー数である。けれども、番号のみが24で、氏名が記されているのは217である。

その217名の入会日付をみると、旧メンバーが18、1917年入会メンバーが16、

1918年が47、1919年が112、そして入会時未詳が24となっており、1919年入会が急増していることがわかる。しかも、その1919年入会者は、同年5月7日までの入会者であり、同年12月26日入会が1名記録されているものの、その間の入会記録が見あたらない。

ちなみに、本稿に登場する中心的人物の入会日付を見てみると、(シャトフがロシアへ帰国する〔後述〕前に組織化の任務を委ねた) シュナベルは旧メンバー、ピアンキは1918年2月6日、ペルクスは(クリーヴランドから移住して来たからであろう) 1918年12月4日である。

当時、URWとは敵対する陣営に属し、『ルースコエ・スローヴォ』の編集者の一人であったヴィリチュルですら、投書の中で次のように記していた⁽¹³⁾。「合州国のロシア人組織の中で、広い影響力を持った一つの強力な組織もない。二、三の例の中で唯一ロシア人は、教育センターとして人気のある名前、いわゆる『人民の家』を設立するのに成功した」。その後、「事実、当地のロシア人は、90%は労働者であるけれども、さまざまな政治的信条によって広く分断されている」と続くのだが、その成功例がURWであり、「教育センター」にとどまらないことを著者は伏せている。

また、1919年5月20日付文書添付資料「米国〔駐米日本〕大使館ニ関係アル某露国人(A)ノ調査ニ係ル米国ニ於ケル過激派及社会党之支部」には、該当する76もの組織が記載されており、そのうちアメリカ社会党ロシア人部が36、URWが16、合わせて52で、全体の68%を占めている⁽¹⁴⁾。それは全体の中でのURWのバランス、およびアメリカ社会党ロシア人部と比べて組織上の劣勢を示しているのだが、オメリチェンコの当時の記述によれば、「自らの影響力と数に関して、社会主義部はURWよりヨリ人気がな」かったのである⁽¹⁵⁾。

その人民の家で1919年6月半ばにURW連盟の会議が開かれている。司法省捜査員デイヴィス(M.J. Davis)の1919年6月19日付報告によると⁽¹⁶⁾、ニュージャージー州エリザベスタウンのドゥボフ(E. Duboff)が議長に選出され、ニューヨーク支部はピアンキ、ペルクス、シャッツ(Shotzとあるが、B. Shatzであろう)によって代表され、シュナベルも出席していた。

会議内容を抜粋すると、ミハイロフ (Michajoloffとあるが、Михайловであろう) を連盟から追放すべきとの発言に対して、ビアンキは自重を求めた。その理由は、もしも我々がそうしつづけることを彼が知るならば、彼は司法省へ駆け込み、連盟全体と我々の活動を当局へ暴露するであろうからだった。

ペルクスはこの会議だけで決定できない多くの重要問題があるので、大会を招集することが必要だと発言した。目下、連盟は危険の中にあり、いかに組織するか、いかにこの組織、ポリシェヴィキ、ソヴェト [後述]、そして社会党の間の関係を議論するかについて新しい計画が立てられなければならない。またロシアとのコミュニケーションも確立されなければならない。後者についてペルクスは付言した。「我々是我々の一人をすでに彼地へ送ったが、しかしこれまでのところいかなるニュースも受け取られていない」。この問題を審議する委員会が最後に選出され、構成員はペルクス、ビアンキ、ベルキン (Bielkinとあるが、B. Belkin)、スヴェトロフ (Swietloffとあるが、A. Svetlov)、クシュネレフ (Kushnereffとあるが、F. Kushnarevかもしれない)、シャッツ兄弟であった。

そのような活動を展開していたURWに立ちをはだかったのが1919年11月7日夜の司法省による襲撃・大量逮捕であり、一気に組織存亡の危機が訪れた。

ニューヨーク事務所の密偵D.D. の1919年11月27日付報告によると⁽¹⁷⁾、IWWロシア人支部はURWと合併し、URWを(非常に近い将来、おそらくシカゴで開催予定の)自らの大会に出席させようと試みているとのことであった。同密偵には、そのことが成功する可能性はある、なぜならばURWの指導者のすべてが逮捕されており、IWWはURWが再組織化できるまでURWとまとまっているであろう、と見られていた(ただし、以下紹介する再組織化が進んでいったかで、1920年3月時点でURWとIWWロシア人支部の合同大会がシカゴで開催予定との報告もあるが⁽¹⁸⁾、その後の進展の報告が続いていない)。

その再組織化の報告は、早くも同密偵の1920年1月28、30日付報告でなされた⁽¹⁹⁾。すなわち、URWのいく人かのメンバーが粉碎された諸支部を再組織化することを決定し、1月30日午後8時に最初の会議を開催することとなった。が、組織名が自己修養協会 (Общество самообразования) とされたように、以後、

URWの再建はさまざまな組織名のカムフラージュを伴って試みられていく。

当日、グループ内に潜入していた同密偵は、予定された会場に出向くが空で、〔古参メンバー〕ポニャトフスキー（Ponyatovsky）に連れられてブロンクスの日刊紙『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』印刷所に行き、誰がURW組織化の企ての背後にいるのか問うと、ヴィシュロフ（Wyshloff）、ギセンキン（Gisenkin）、ゴロディエンコ（Gorodienko）が主役であり、3名とも『労働者と農民』の編集スタッフであった。

なお、ゴロディエンコは前篇注49に挙げたゴルディエンコと同一人物とみられ、また『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』が親ボリシェヴィキから親アナキストとなったとの談話の確認が果たされる記述が、1920年4月17日で終わる期間の特別報告「大ニューヨーク地区における急進的諸活動」の中の仮に統一ロシア人専門職同盟と訳しておく組織（United Russian Professional Unions）の項にある⁽²⁰⁾。すなわち、そこでは同執行委員会の会議が開催されたことが報じられ、同紙が共産党の日刊紙だと多くの不満を受け取っており、これらの非難を論駁するため一兩日中に同紙が強力に「アナキスト的」であると主張する論文が載せられることとなった、とある。

さらにフィラデルフィアの1920年11月28日付密偵報告では、同紙は「URWのためにカムフラージュされた統一ロシア人専門職同盟の正式機関紙である」とまで報じられるようになっている（前篇47頁参照）⁽²¹⁾。ただし、翌21年8月7日にニューヨーク市で開催されたロシア人勤労者同盟（Union of Russian Toilers）会議の密偵報告によれば⁽²²⁾、同紙は組織にとって必要であり、同紙の印刷機械の負債2,000ドルを支払うための資金確保が画策されているものの、同紙がURWの偽装組織の正式機関紙であるべきことがこの時点でもなお論じられていた。

またボルティモアの1921年8月16日付密偵報告によれば⁽²³⁾、1919年11月の襲撃以来、URWは名前を（当地では労働者救済協会へと）変えたばかりか、メンバーはクリスチャン・ネーム（洗礼名）だけと数字で入会し、いかなる会議においても絶対に受取ないし支出は読み上げられず、二、三の最も信頼され

ている指導者だけがその財政に通じていたという。

URW再組織化の密偵報告が続く。

ピッツバーグでの1920年6月5日付報告によると⁽²⁴⁾、昨年11月のURW襲撃以来、組織は完全に粉碎されたかのようにみえたが、しかし事実はそうではなかった。目下、彼らは実際にあらゆる町で支部をもち、メンバーをうまく増やしている。とくにロシア人市民同盟 (Union of Russian Citizen) からメンバーを獲得しようと活動的である。

デトロイトの場合、1919年に7支部を持っていたURWは、1919年11月の襲撃で約100名が拘引され、1920年初め、組織は混沌とした状態にあり、ほんのわずかな文献しか配布されず、集会が個人宅で小グループで開かれるだけだった。1920年8月になってようやく古い集会場が確保され、翌21年7月からは集会を毎週水曜日の夜に定期的にもつこととなる。ただし、表向きはロシア人労働者専門職同盟 (Professional Union of Russian Workers) の名で⁽²⁵⁾。

ここに至ってURWの中のアナーキスト・グループは、合州国・カナダ・アナーキスト-共産主義諸グループと旗幟を鮮明にし、同連盟 (Federation of Anarchist-Communist groups of the United States and Canada) を組織した。

1920年8月15-16日にニューヨーク市で同連盟の第2回大会が開催され、捜査局シカゴ事務所が入手した同大会印刷物によれば⁽²⁶⁾、13名の代表および〔下記のように、連盟未加入の〕アメリカ・アナーキスト-共産主義グループ1代表が出席し、重要な議題はURWの清算および組織の資金や他の財産をアナーキスト-共産主義グループの手元に置くことであった。

そして代表たちは、ニューヨークの『アメリカンスキエ・イズヴェスチャ』を、アナーキズムの根本方針に好意的であるゆえに、すべてのメンバーに説いて支持させることとなった。とともに、自らの連盟機関誌『ヴォルナー [波]』(Волна) は財政的にも道徳的にも何が何でも支援されるべきである、と。

その『ヴォルナー』1920年1-2月創刊号は、「アナーキスト-共産主義者月刊雑誌」と自ら称し『パンと自由』の後継誌としてニューヨークで刊行されていた。刊行地および責任者〔パヴロフ (I. Pavlov) ら〕は秘密にされ、刊行地

は号によって変えられた⁽²⁷⁾。

1920年11月14日にはフィラデルフィアで地区大会が開催され、密偵報告によれば⁽²⁸⁾、8つの地区の19グループから10代表が、そして唯一連盟に所属していないニューヨークのアメリカ・アナーキスト-共産主義グループの1代表が出席した。15の議題のうち議題2「国際大会の招集」では、アメリカおよびカナダの国際大会をまず招集することが本大会によって推薦された。議題11「第3回全コロニー大会」では、「原則にもとづいて、また実際的な配慮ゆえに、第3回全コロニー大会〔後述〕にいかなる参加もしないことが大会によって決議された」と記されるだけだった。議題12「アナーキスト-共産主義諸グループ連盟」では、48頁から成る連盟の機関誌『ヴォルナー』が11月20日頃に刊行予定であり、そして連盟財務担当者が目下約500ドルばかりか、URWの古い連盟から残された総額1,800ドルを保持していることが表明された。

ここにURW連盟から合州国・カナダ・アナーキスト-共産主義諸グループ連盟への財政的継承が裏付けられる。同諸グループ連盟のその後については、現段階では史料に乏しく、改めての調査が必要だが、URWの後継組織は分裂し、同諸グループ連盟が不参加を決議した第3回全コロニー大会を開催していく組織も出て来て、それについては次章第3節で取り上げることにする。

5 在米ロシア人コロニー統一の試み

1) 第1回ロシア人全コロニー大会まで

ロシア2月革命勃発は、『HM』と『ゴース・トゥルダー』においてともに1917年3月16日号で報じられた⁽²⁹⁾。

革命勃発の第一報が在米中で精力的に講演活動等をこなしていたトロツキー、ブハーリンらのもとへ届いた後、直ちに3月27日にトロツキーらの帰国第一陣が発ち、4月5日にはブハーリン、ヴォロダルスキーらの第二陣が続いた⁽³⁰⁾。

革命勃発の報道以前、在米ロシア人移民にとってアメリカにおけるツァーリ政府機関との関係は最も疎遠なものであった。しかし、革命後事態は急変した。ロシア人移民は（総）領事館をアメリカにおけるロシア人警察部門とみることをやめ⁽³¹⁾、帰国のためのヴィザ（場合によっては政治亡命ゆえにパスポート自体）の取得のためにそこへ殺到することになった。

そのきっかけを与えたのは、1917年3月6（19）日に採択されたロシア臨時政府による政治的監禁者・亡命者の恩赦に関する法律であった。それはロシア外務省の回状によって合州国およびカナダのすべての総領事（ニューヨーク、ピッツバーグ、シカゴ、サンフランシスコ、シアトル、ヴァンクーヴァー、モントリオール）に伝えられ、政治亡命者の帰還への協力（時には金銭的援助までも）が命じられた⁽³²⁾。これによりニューヨークを中心に総領事館のある各都市でロシアへの政治亡命者の送り出しに関する委員会設立の動きが加速する。

『ゴロス・トゥルダー』1917年4月6日号によれば、ニューヨークではすでに22の組織が加わる会議（続く報道によれば、ニューヨーク市ロシア人革命的諸組織会議）が形成され、その目的はロシアへ出発しつつある亡命者の調整と管理であった。すでに同会議によって34名から成る第一陣が送り出され、4月12日にヴァンクーヴァーを離れ、横浜経由でウラジヴォストークへ向かう予定であった。同会議は上記総領事のいるすべての都市で同種の会議形成に速やかに着手するよう呼びかけた。そしてニューヨーク会議に関する情報を同書記が提供できるその問い合わせ先を記していたのだが、それは『HM』と『ゴロス・トゥルダー』であった⁽³³⁾。両紙の共同がこの帰還運動によって始まっていたのである。

『ゴロス・トゥルダー』の方は1917年3月23日号掲載の「すべてのロシア人労働者へ」の中で、「現時点で我々の努力は、ロシア国内でそのような〔同誌のような〕機関紙の創刊と維持に向けられなければならない」と表明し、直ちに2,000ドル以上の基金を2、3週間で集めるために寄付を呼びかけた⁽³⁴⁾。

ニューヨーク市ロシア人革命的諸組織会議（加盟組織は24に増加）が準備した97名から成る第二陣が、1917年4月23日にシアトルへ向けて出発した。

ニューヨーからウラジヴォストークまでの経費は一人あたり約180ドルであった。同会議は委員会組織を持つようになり、同書記をコトゥリャレンコ（Д. Котляренко）が務めた。ニューヨーク会議委員会書記宛の問い合わせは、ここでも『ゴーロス・トゥルダー』と『HM』気付であった。

同会議委員会が発行する証明書があれば政治亡命者は、いかなる証明書の提示もなしに障害なく通行証明書を領事館から得ることができた。そのため受付窓口が日曜を除く毎日午前10時から午後3時まで開設され、午後6時から8時までは委員会メンバーによる当直が土曜と日曜を除く毎晩配されていた⁽³⁵⁾。

『ゴーロス・トゥルダー』1917年5月11日号では、同誌の清算が表明された。すなわち、「刊行グループ」の最近の実務会議においてアメリカでの刊行停止を方向づけ、ロシアでの機関紙刊行（できれば日刊）に着手することが決定された。そのため予約購読者には、ロシアからの新聞を受け取るか、『HM』など他の新聞を受け取るか、各自の選択をできるだけ速やかに通知してもらうことが呼びかけられた。なお、同号には上記基金のその時点での総額が記されており、それによると5,406.18ドルと125ルーブリ兌換紙幣であり、当初の予想をはるかに超えるものであった⁽³⁶⁾。

同誌編集スタッフの帰国についてだが、タニーの証言によれば、シャトフ夫人ら21名の一行は1917年5月26日にホーボーケンから「オスカル2世」号で東へ向かって出帆したのに対して、シャトフとヴォーリン（Волин [В.М. Эйхенбаум]）は全国から一群が集まるまで待ち、それから姿をくらました。彼らの帰国ルートを誰も知らず、シアトルにいるとの消息があった。全体で約600名のアナーキストが出発したが、ロシアへ辿り着けなかった者もいた⁽³⁷⁾。シャトフらは西回りで7月（露暦）にペトログラートに到着し、8月24（11）日に『ゴーロス・トゥルダー』を復刊することになる⁽³⁸⁾。

このような帰国ラッシュと入れ替わるように1917年6月19日、ロシア臨時政府により駐米ロシア大使に任命されたボリス・バフメチェフ（Б.А. Бахметев）ら約40名から成る特別使節団がウラジヴォストーク、日本、シアトル経由でワシントンに到着した。翌20日、バフメチェフは公式にウィルソン大統領に拝謁

した。このあと使節団は7月5日に常設の駐米ロシア大使館となり、バフメチェフは特命全権大使としての信任状をウィルソンに捧呈することになる⁽³⁹⁾。

その使節団の中で産業・貿易を担当したオメリチェンコは、1920年にコルフ(O.A. Корф)とともに『ロシア人-アメリカ人便覧』を編集・刊行し、それは両国・両民族の相互利害に関するデータと情報を集めた本格的試みであった⁽⁴⁰⁾。編者たちは約1,100にもものぼる合州国とカナダにおけるロシア人、ウクライナ人、リトアニア人、ユダヤ人等の組織の詳細なリストを載せているが⁽⁴¹⁾、そこにはアメリカ共産党、アメリカ共産主義労働党ないしURWのいかなるロシア人支部もないと言い、その理由として以下のように記している。1920年初め、これらの組織へ多くの襲撃があり、連邦や州当局によって多くが逮捕されたゆえに、それらの以前の住所はいかなる価値もないからだ、と⁽⁴²⁾。反ソヴェト政権の立場を取った編者たちにとっては好都合な理由づけと言うべきであろうが、それでは在米ロシア人労働者の一方の面がごっそり抜け落ちてしまう。

反ソないし親ソ的立場からだけの考察では在米ロシア人の全体像は捉えられない。両立場がせめぎ合う現場から、在米ロシア人組織統一の試みを手がかりに在米ロシア人移民労働運動の中へと入って行くことにする。

なお、バフメチェフ一行が到着する直前、1917年6月2-3日にアメリカ社会党ロシア人部はバッファローで第2回同ロシア人部連盟会議を開催した。それは「事実上、現時点でアメリカ社会党内のすべてのロシア人部の最初の統一会議となるであろう」と謳われたが、実際、1915年5月の18部、250～300名の会員を抱えて第1回会議が開催されたあと2年ぶりに開催されたその時、組織は27部、400～500名の会員へと急増しつつあった(前篇53頁参照)。そこでは、ロシア革命によって提起された問題やロシア人全コロニーに対して自分たちが取るべき態度等が論じられたが⁽⁴³⁾、本稿では、アメリカ社会党(のちにアメリカ共産党またはアメリカ共産主義労働党)ロシア人部連盟に焦点を合わせることはせず、可能な限り労働運動に近寄って考察することにする。

バフメチェフの前任大使ユリー・バフメチェフ(Ю.П. Бахметев)は、すで

に1917年3月26日に駐米ロシア各総領事へ、帰国費用について必要な範囲で弁償、前貸しとかの便宜を図るように、ただし貸付申請に際して請願者が政治亡命者の疑いがある場合は照会のために連絡せよ、との通達を出していた⁽⁴⁴⁾。

ヴィザ発給条件の緩和ばかりか、そのような便宜が、結果的に政治亡命者の帰国を許す可能性を高めた。7月攻勢敗北後、それを制限する対応策として1917年8月4〔17〕日に出された政治亡命者による通行可能証明書交付の新しい規則は、合州国では憤慨と不満を引き起こした。ボリス・バフメチェフの外務大臣宛8月25日付報告によれば⁽⁴⁵⁾、当地で開催された政治亡命者代表大会で以下のような決議がなされた。

- 1) この指令は政治亡命者が恩赦を利用する可能性を奪う。
- 2) 政治亡命者の帰国の問題は、他のロシア市民と同一の条件で提起されえないし、されるべきではない。
- 3) ……/4) 政治亡命者には、帰国して新しい国のための闘いに参加すること以上に考慮に値する理由はありえない。

以上を考慮に入れて、さらに大会は8月4日の新しい規則に反対して抗議し、規則が変更されるためにあらゆる処置を講じる。返答がない場合、ペトログラートに特別な派遣団を送ることを決議した、と。

これに対するバフメチェフの論評は、彼らは祖国の深刻な状況を全く理解していない、あらゆる政治亡命者の送り出しを一時停止することが時宜にかなうというものだった。

帰国をめぐる明らかバフメチェフと在米ロシア人政治亡命者との間に隔たりがある。が、この時期、在米ロシア人移民にとってもう一つの問題が立ちだかっていた。アメリカ参戦の翌月、1917年5月に選抜徴兵法が議会を通り、ロシア人市民に対しても不法な形でアメリカ軍徴募が行われはじめた。そのことが、ロシア人市民の権利を守る目的をもつ組織を生み出すきっかけを与えた。在米ロシア人コロニー統一の試みともなるその動きを、まずオメリチェンコが上記の現職にあった1917年10月に刊行した小冊子『ロシア人コロニーの組織化に関する問題によせて』でみていくことにする⁽⁴⁶⁾。

1917年8月12-14日に政治亡命者の出発に関する革命的諸組織代表者大会が開催され、以下が決議された。1) ロシア人コロニーの状態は革命後少ししか変わらなかったこと、2) ロシア人コロニーの現状が政府代表の特別な注意を求めていることを考慮に入れて、大会は、この状態へロシア政府の注意を向けながら、同会議にロシア人亡命者の利益擁護のため全般的ロシア人機関のその場での創設に自らのイニシャティヴを取ることを推薦する、と⁽⁴⁷⁾。

大会参加者はその決議実行を果たそうとしはじめ、各地でさまざまな運動があった。以下、それらを抜粋する。

1) デトロイトにおいてロシア人市民擁護のための会議デトロイト支部が組織単位の加盟で設立された。実際の活動は、ロシア人市民の不法なアメリカ軍徴募に反対するいくつかの抗議集会開催に現れた。

2) 1917年8月2日、ピッツバーグでロシア人市民同盟が形成された。同市民同盟には(デトロイト会議に反対して)組織ではなく個々のロシア人市民が(月会費25セントで)入会することとした。

3) だいぶ以前からボストンにロシア人労働者相互援助協会が存在した。同協会の綱領はロシア革命までにすでに出来上がっていたが、すべての協会を一つの連盟に統一することには成功しなかった。それはある程度までロシア革命が在米ロシア人労働者組織に分裂をもたらしたことによっていた。

4) ニューヨークにおいてロシア人社会団体中央委員会(Центральный Комитет Русских Общественных Организаций)が設立された。30以上ものさまざまな種類の組織が統一されたものである同中央委員会は当時、在米ロシア人諸組織代表大会招集についての考えを強力に練り上げていた⁽⁴⁸⁾。

同中央委員会とアメリカ社会党ロシア人部は、ほとんど同時にそのような大会の招集とプログラムに関する見解をまとめた。対比しやすいように以下、左側に社会党ニューヨーク・ロシア人部によって作成された大会の議事日程を、右側に1917年9月17日の会議で同中央委員会によって採択された大会プログラム案をそれぞれ掲げる⁽⁴⁹⁾。

A. 社会党ニューヨーク・ロシア人部

- 1) ロシア人コロニーの統一
- 2) ロシア人コロニーとロシア大使館・領事館
- 3) アメリカ軍隊へのロシア人市民の引き込みに関する問題への関係
- 4) ロシア人コロニーの要求 / a) 文化-啓蒙的〔援助〕 / b) 法律的援助
- 5) ロシア人の自主的活動 / a) 労働組合^{ユニオン}ロシア人部 / b) 相互援助協会 / c) ロシア人非政党組織 / d) [アメリカ] 社会党ロシア人部 / e) 協同組合
- 6) ロシア人コロニーとアメリカ労働運動
- 7) 政治的および非政治的亡命者の祖国への大量出発
- 8) 熟練労働者の祖国への大量出発
- 9) ロシア人コロニーのロシア革命権力機関との直接的関係

B. ロシア人社会団体中央委員会

- 1) ロシア人コロニーの世界大戦への関係
- 2) ロシアへの関係
- 3) アメリカへの関係
- 4) 兵役義務への関係
- 5) パスポートについて
- 6) 駐米ロシア正式代表について
- 7) 専門家も一般ロシア人もロシアへの出発について
- 8) アメリカにおけるロシア調達委員会について
- 9) 政治的なものについて
- 10) ロシア人コロニーの教会-教区的、宗教-共同体的生活について
- 11) ロシアへの代表派遣について
- 12) 啓蒙的活動について
- 13) 相互援助について
- 14) 報道機関^{プレス}について
- 15) 恒常的な中央組織の組織化について

両者を比較すると、共通する項目は1) アメリカ軍への徴募、2) ロシアへの出発、3) 駐米ロシア代表（大使館）との関係ぐらいであるが、A. では、2) に関して亡命者および熟練労働者の強調があり、またロシア革命機関との直接的関係など、ロシア革命への能動的姿勢が顕著である。他方、B. の世界大戦およびアメリカとの関係をみると、以下のバフメチェフらの試みに相通じやすい側面をもつ。

1917年9月29日～10月1日、ロシア臨時政府駐米大使館によって招集されていたロシア大使バフメチェフとそのスタッフ、アメリカ各地のロシア（総）領事、そして広範囲にわたるロシア人社会団体各代表の協議会がニューヨークで開催された。そこで可能ならばさまざまな政治的傾向にかかわらず在米ロシ

ア人コロニーに存在するすべての社会団体の代表者大会を招請することが不可避であるとの合意が得られ、そして大会招集案を練ることが委任される委員が選出され、統一組織委員会 (Объединенный Организационный Комитет; United Russian Convention Committee) が形成されることになった。

『HM』1917年10月25日号によれば、統一組織委員会によって予め決められた議題は、次の通りであった。

- 1) 法律的援助 / 2) 医療援助 / 3) 文化-啓蒙的援助
- 4) アメリカにおける兵役義務の遂行
- 5) ロシア市民への祖国帰還〔手続等〕の簡易化
- 6) ロシア人コロニーの代表的機関の創設およびこの機関と駐米ロシア正式代表との相互関係

それら諸問題に対する関係組織からの回答は、1917年11月15日までとし、12月末に大会開催が予定された。

掲載末尾には統一組織委員会の8名の名が挙げられているが、その中にはヴァインシチェイン (Г. Вайнштейн)、ゲールヴィチ (Н. Гурвич)、ストクリツキー (А. Стоклицкий) のアメリカ社会党ロシア人部の有力者が加わっていたし、URWのシュナベルもいた⁽⁵⁰⁾。要するに、この時まで両陣営とバフメチェフ支持グループとの共同が模索されていた。

このあたりの事情については、ゲールヴィチの『HM』掲載論文が詳しく説明してくれている⁽⁵¹⁾。すなわち、『HM』の最近の号から読者はすでに在米ロシア人大会招集に向けてそれぞれ別々にイニシャティブを取った二つのグループの統一について知っている。つまり、1) クリーヴランド・グループ (それにアメリカ社会党ニューヨーク・ロシア人部の下で組織された組織委員会が隣接する)、2) 大使館によって招集された会議 (上記) で社会団体から選出された代表グループの〔統一〕組織委員会。後者の7名 (ニューヨークから5名、その他から2名) から成る〔統一〕組織委員会が、大会招集の準備作業を委任された。

前者のクリーヴランド・グループは当初、地元で10月27日に大会招集を考え

ていたが、アメリカ社会党ニューヨーク・ロシア人部の下での組織委員会からクリーヴランド〔社会主義・労働者組織〕会議（書記であるペルクスも既述のようにやがてニューヨークへ移って来る）へ宛てられた書簡で統一を呼びかけられたことにより、大会を延期した上で両者が統一した。そして1）のクリーヴランド-ニューヨーク・グループと2）の組織委員会との交渉により、改めて在米ロシア人大会招集に関する統一組織委員会が創設され、同委員会は両グループ同数の計14代表から構成され、地域配分としてはニューヨークから10名、他から4名となった、と。

クリーヴランド・グループに先陣を切られたものの、ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部メンバーが主導していったのである。

1917年11月には、統一組織委員会に紳士・子供服組合ロシア人支部およびエスエル・ニューヨーク組織から各代表1名が補充され、大会参加を表明した各都市のアメリカ社会党ロシア人部、アナーキスト・グループ、URW、そしてロシア社会民主党メンシェヴィキ・グループが組織リストに加わった。さらに開かれたばかりの総領事たちと若干のロシア人コロニー代表の会議で大会組織のため6名からの委員会が選出され、その中に極左グループは入ったが、ヨリ多くの右派分子を代表する統一ロシア人組織中央委員会（上記ロシア人社会団体中央委員会と重なるものとみられる）の参加は認められなかった⁽⁵²⁾。12月に入って、統一組織委員会会議によって大会作業への援助を、ロシア共和国のメンバーに入っているリトアニア、ウクライナ、ラトヴィヤ、ポーランド、ユダヤ等各民族へ呼びかけることが書記局へ委任された⁽⁵³⁾（が、他の民族諸組織との共同どころではなく、ロシア人の運動自体が分裂していく）。

1917年12月30日、大会招集に関する統一組織委員会の臨時集会が開かれ、以下が決議された。

1）統一大会招集に関する問題について、統一組織委員会は統一〔ロシア人〕組織中央委員会と何らかの合意に達する程度に必要なすべてを受け入れることとして、中央委員会代表との交渉のために特別委員会が選出された。

2）在米ロシア人全コロニー大会はニューヨーク市で1918年2月1-3日に

招集され、大会参加の権利は在米の宗教・政治的信条の如何にかかわらずすべてのロシア人組織に提供されることとなった。

3) 代議員選出に関して、50名までの組織は1代議員を選ぶ権利をもち、以下、100名で2代議員、200名で3代議員、300名で4代議員、400名以上で5代議員とした。

4) 大会組織化と招集についての全経費(代議員旅費も含む)は、代議員数に応じてすべての組織間で比例して割り当てられることとした。

5) 議事日程は以下の通りとするが、補充する権利は各組織に与えられ、最終的な議事日程は大会で確定されることとした。

①法律的援助／②文化-啓蒙的援助／③医療援助

④ロシア市民への祖国帰還〔手続等〕の簡易化

⑤ロシア人コロニーの代表的機関の創設およびこの機関と駐米ロシア正式代表との相互関係

⑥ロシア市民をアメリカ軍に引き込むことについて⁽⁵⁴⁾

この決議は翌月に統一組織委員会のストクリツキーら3名の連名で公表されたが、そこには以下のような細部の変更があった。

1) 10名以上の組織で、1917年12月1日以前に組織されたすべてのロシア人組織が参加できる。

2) 10～50名までの組織から1代議員；50～100名で2代議員；100～200名で3代議員；200～300名で4代議員；400名までとそれ以上でも5代議員；10名未満の組織は代議員派遣のために互いに合併することができる。

3) 各代議員の経費は概算で約25ドルとなる。それには大会組織経費と旅費(切符だけ)も含まれる、等々⁽⁵⁵⁾。

結局、めざす大会は分裂大会となった。その間の経緯を、以下で紹介する第1回在米ロシア人全コロニー大会二日目のストクリツキーによる統一組織委員会報告によってみておく。すなわち、全コロニー大会招集の不可避性の考え方は、さまざまな(とくにニューヨークとクリーヴランドの)組織で同時に起こった。問題は大使のイニシャティヴで招集された(総)領事の大会、もっと

正確に言えば、協議会であった。のちに、この協議会で選出された大会招集のための委員会にニューヨークとクリーヴランドの組織が合体し、統一組織委員会が組織された。この統一組織委員会は、[上記の]「統一〔ロシア人〕組織中央委員会」との苛烈な闘争を頑張り通した。「共通の大会」をめざして交渉が行われたが、しかし「統一組織中央委員会」は自分たちだけの大会を招集することを決定した、と⁽⁵⁶⁾。

1918年1月26日、ニューヨーク市カジノ・ホールでロシア人諸組織会議が開かれた。約150名が集まり、〔ロシア民主主義防衛同盟議長〕セメノフスキー（А.Д. Семеновский）が会議の組織者として開会の辞、つまり、いずれの委員会も非難するのではなく、状況进行研究し、出口を見つけ、誰がコロニーの名で話す権利をもつかを決するために会議が招集された、と述べ、議長に選ばれた。委任状審査のあと、35名〔他の史料では、32名〕の代議員を会議が承認し、以下の議事日程が満場一致で採択された。1）我々是一个の会議だけを望むか？；2）唯一の会議の可能性；3）諸手段と諸決議⁽⁵⁷⁾。

同会議は引き続き1918年1月31日に同所で開かれ、その招集は（バフメチェフ駐米大使の「秘密広報管理者」とアメリカ陸軍省軍情報部（MID）報告で報じられた）セメノフスキーによって、在米ロシア人が信頼を置いていない大使が、実際は彼らを支援しようとしていることを彼らに示す意図をもっていた。しかし、同報告によると、さまざまなロシア人諸組織からの代議員はほんのわずかな例外を除いて大使に好意的である団体の人々だけから成っており、全体の会議は茶番狂言以外のなにものでもなかった。すなわち、出席者の一人が問うた、なぜバフメチェフはロシア国籍保持者をせかしてアメリカ軍に入らせることを防ぐための手段を講じないのか？ それに対して、バフメチェフは合州国軍の計画へ干渉することを公式に否定した、つまり軍へ選抜徴兵されるいかなるロシア人市民のためにいかなる手段も講じないであろうことを意味した、と⁽⁵⁸⁾。

このMID報告は、ウィルソン政権からの信任を得ていたバフメチェフ側の運動の報告としては手厳しい。ということは、かなり実相に近いとみてよいであろう。ロシアの法律によれば、ロシア市民はロシア政府の特別な許可なしには

他国へ帰化することはできないとのことであり⁽⁵⁹⁾、なおさら、アメリカで兵役を勤め上げることへの反撥があった。

バフメチェフが在米ロシア人移民労働者の支持を得られなかった原因は、ロシア市民のアメリカ軍徴兵に対して決然とした態度を示せなかった一方で、ウィルソン政権による支援あつての「大使」としての存続であり、その財政支援による旧ツァーリ勢力を含むボリシェヴィキ政権打倒運動への加担にあつた⁽⁶⁰⁾。

1918年6月25日、ニューヨーク市で1,200名以上が集まったバフメチェフ糾弾集会が、第1回ロシア人全コロニー大会執行委員会(下記)のイニシヤティヴで開かれた。最後に登壇したヴァインシチェインは、コロニーの利益擁護の点でのバフメチェフの無活動、大使でありながら自らが果たしている反革命的役割を非難した。集会は、いまやバフメチェフの周りに旧ツァーリ勢力など反革命分子が集まっていること、大使の地位に居直っていること、正式大使でないことをアメリカ政府に訴えることなどの決議の採択で終わった⁽⁶¹⁾。

このロシア市民のアメリカ軍徴兵問題は、当時のマスコミでも取り上げられており、例えば『ニューヨーク・トリビューン』1918年7月20日号では、選抜徴兵法は外国人(alien)の徴兵を明確に排除しており、軍に今いる多くのロシア人市民は非合法的に誘導されてきている、と指摘されていた⁽⁶²⁾。そして同紙9月23日号では、ロシア人市民がアメリカ軍へ徴兵されていることが本日、軍当局によって否定され、外国人は第一帰化書類を取得し、それからアメリカ市民になる希望が再確認されない限り、この国によって徴兵されない旨が報じられた⁽⁶³⁾。

1919年1月2日付でボリシェヴィキ政権より「アメリカ合州国における外務人民委員部代表」に任命されたマルテンス(Л.К. Мартенс)は、3月19日にその信任状をアメリカ国務省へ送った⁽⁶⁴⁾。引き続き4月10日、マルテンスはワシントンのバフメチェフ宛に、あなたのロシア大使の地位は臨時政府の崩壊によって合法的に終わったので、すべての資金と財産を自分へ委譲すべきである、と書き送ることになる⁽⁶⁵⁾。

1918-19年、ロシア人移民コロニーは、ニトブルクの表現によれば、「荒れ狂っていた」⁽⁶⁶⁾。すでに1917年末、アメリカ社会党ロシア人部連盟とニューヨーク・ロシア人社会団体全国委員会との間で、ロシア人移民コロニー代表大会の招集について話し合いがついた。がしかし、政治的対立がその実現の妨げとなった。結局、すべてのロシア人組織を統一する試みはまとまらず、1918年2月にニューヨークで二つの大会が別々に開催されることになった。

一つは、2月1-4日の「全コロニー」(общеколонийный)大会であり、赤旗とアメリカ国旗の下で、220の社会主義諸派のさまざまな組織(4万人を有する)から170名の代議員が出席した(ただし、このニトブルクに拠った記述では各数字の根拠が示されず、すぐ後で私は第一次史料にもとづいて第1回在米ロシア人全コロニー大会としてより具体的な説明を試みることにする)。

もう一つは、2月9-11日にニューヨーク市アーリントン・ホールで開催されたロシア人コロニー「全市民」(общегражданский)大会であり、ロシア〔帝政の国旗を臨時政府が共和制の国旗として流用した〕三色旗とアメリカ国旗の下で、37の「中道の」組織(3万200人を有する)の78代議員が出席した。出席者の基本的立場は、ロシアの権力を憲法制定会議へ引き渡すことに賛成し、アメリカ国民および政府への忠誠を表すことであった。大会は在米ロシア人諸組織連盟(Federation of Russian Organizations in America)を創った⁽⁶⁷⁾。

その三日目の議論が、以下のようにMID報告にある⁽⁶⁸⁾。多くのロシア人市民が不法にアメリカ軍にとられている問題で、アメリカ政府は誰も不法に選抜徴兵することを望んでおらず、すべてのトラブルはロシア人が免除される権利を主張する法律を知らないという事実にある、との一発言があるやいなや、「彼は嘘つきだ」との声が会場から上がり、紛糾した(『ニューヨーク・タイムズ』の報道によれば⁽⁶⁹⁾、議長を務めたセメノフスキーは警察官導入をも要請し、事態を收拾した)。オクンツォフもロシア大使と(総)領事を、彼らがロシア人コロニーの利害を守らず不活動ゆえに痛烈に批判した。この問題により注意深く取りかかるべきだとの発言もあるものの、わずか1枚強しか報告されていない文章の中で批判のトーンが優勢であった。

かかる対立状況下で、後者の在米ロシア人諸組織連盟に属していたオメリチェンコによる『ロシア人コロニーの組織化に関する問題によせて』の残り3分の1には、その組織統一をめざし試案として提起された綱領が掲げられている。それは短命に終わるといふよりむしろ変質していくことになる〔次篇参照〕同連盟と運命をともにするのだが、その紹介をしておく。

ロシア人コロニーをなんらかの政治的基盤の上に組織しようと努力すべきか？ もしもこの問題を駐米ロシア正式代表の活動と結びつけるならば、その答えは否定的なだけである。なぜならばロシア人コロニーにおいては、なんらかの一つの政治的綱領の上に統一が不可能なほどあまりに多くの種々の傾向が存在しているからである。その上、アメリカとの難しい関係がある。つまり、ロシア正式代表は合州国における内政闘争へ干渉することはできない。また、ロシア代表は〔国と国との関係を前提としているので〕いずれかのアメリカの政党をも後援することはできない。それゆえ大使と（総）領事は、アメリカの内的生活においていかなる目的であれ、政治的目的を自らに据えるロシア人組織を後援することはできない⁽⁷⁰⁾。

現在最も緊急の課題は、他の民族ではある程度すでに組織されている〔のに、ロシア革命勃発によって生じている政治的対立による分裂ゆえにそうでない〕生粋のロシア人移住者の統一である。統一の形態について言えば、二つの型の統一がここでは可能である。すなわち、一方は、一組織メンバーとして他の組織全体の列に入るであろう組織の創設であり、他方は、個々の個人から成る団体の創設であるが、結局のところ、個々の組織メンバーおよび個人として組み入れるところの混合型の機関が想像される。

二つの対立する例がある。すなわち、一つは、ロシア人市民擁護のためのデトロイト会議であり、他の一つは、ピッツバーグ・ロシア人市民同盟である。唯一可能性のあるセンターは〔上記のように、組織ではなく個々の市民参加の〕ピッツバーグ型である。統一のセンターは（総）領事滞在地にあるべきであり、ロシア人コロニーのすべての重要拠点である以下に掲げる都市で、最初に類似の統一を作り出すことが不可欠と思われる。ニューヨーク、シカゴ、

フィラデルフィア、ボストン、ピッツバーグ、クリーヴランド、デトロイト、ロサンゼルス、サンフランシスコ、シアトル。

続いて、資金についてだが、金銭問題は開始早々活動を損ねるので、メンバーの自発的拠金、コンサート開催等々が大事であって、組織の外部から援助をあてにしてはいけない。またロシア正式代表との関係について、センター創設へ向かう運動はロシア大使と（総）領事側からの最も友好的な態度を歓迎しなければならない⁽⁷¹⁾。

最後に、以下のテーゼが示された。

1) ロシア人コロニーの現状は、緊急の課題として自らの目的（つまり、啓蒙的活動；法律的援助；医療援助；さまざまな形の日常生活の援助）を据えながら組織の創設を提起する。

2) 自己組織化と自発的拠金が、類似の団体の創設に際しての根本原理であらねばならない。その際、統一の形態は地方の条件次第で極めて多様でありうる。

3) 合州国のロシア代表は、上述の目的のために彼らのすべての統一の試みにおいてロシア人市民に協力と援助を与える義務がある⁽⁷²⁾。

かかる提案では、既述の在米ロシア人の出国および兵役の喫緊の課題の解決へ向けて何らの方向性すら示されておらず、在米ロシア人労働者の支持を期待するのは無理であったろう。

この統一ロシア人組織中央委員会が主導するグループとの合流は実現しないまま、ついに1918年2月1-4日、第1回在米ロシア人全コロニー大会がニューヨーク市ベートーヴェン・ホールで開催された。それは「在米ロシア人移民の歴史において初めて」のものであった⁽⁷³⁾。合州国とカナダのグループと組織を代表する185名が出席した。上述の代議員選出基数から推定して、大会は（上記の4万人は無理としても最低）約1万人の背景をもっていたことになる。

そこでは、以下抜粋する7つの議案が採択されるのだが、第一番目からして彼らの姿勢は決然としていた。

1) ロシア政府の合州国に対するすべての代表は、合州国におけるロシア労働者から選ばれ、彼らは労働者だけの要求を満たし、合州国や他の政府のいかなる影響からも独立しているべきである。

2) 合州国に住み、ロシアへ戻ることを願うロシア人は、煩わされず負担なしにそうすることを許されるべきである。

3) 合州国に住み、市民権証書を持たないロシア国籍保持者は軍務に入ることを強いられず、今軍務にあるところの人々は即刻解放されるべきである⁽⁷⁴⁾。

2月1日夕方、統一組織委員会からヴァインシチェインが挨拶演説を行い、閉会を宣言し、統一の不可欠性を強調した。そして彼が議長に、ストクリツキーが副議長に、シュナベルとスハレフスキー (М. Сухаревский) が書記にそれぞれ選出された⁽⁷⁵⁾。

早々と初日の会議で、内部対立が明らかとなった。会議を主導したアメリカ社会党ロシア人部連盟が左派を、さらに極左を〔アナーキスト系の〕URWが占め、逆に〔メンシェヴィキ派であろう〕社会民主主義者ニューヨーク・グループ代議員が右派を、そして労働組合運動家と無党派組織代議員が中央派を占めた。

バークマン (A. Berkman)、ゴールドマン (E. Goldman) らの逮捕に反対する抗議決議案ならびに両者の帰国を要求する修正案も提出され、両案とも多数決で採択された。当の両人がゲストとして発言を求められ、ゴールドマンの「私の挨拶をロシアへ伝えて下さい」との結語に答えるかのように、URWを代表してペルクスが、ロシアの革命的人民へ歓迎電報を打つことを提案した。それに対して、ソヴェト人民委員会へ送るべきとのゲールヴィチらの提案が出され、投票の結果、102対50 (棄権14) で後者が採択された⁽⁷⁶⁾。

そして閉会を待たず2月3日に、大会執行委員会を代表してヴァインシチェインが人民委員会議のレーニンとトロツキー宛に打電し、「人民委員会議によって代表されるような革命的ロシア」へ挨拶を送った。その電報には以下の文が続いていた。「我々は全身全霊あなたがたとともにある。我々はロシアのために革命的軍団を組織する準備がある。返答せよ」。

この時期、アメリカ・レフトウィングをも巻き込んでアメリカ赤衛軍（Red Guard）創設運動が起こり、ロシア革命への積極的な支援策としてその計画が練られ、実践に移されつつあった。時を同じくして打電されたアメリカ・ボリシェヴィキ情報局を代表してフレイナ（L.C. Fraina）による、社会主義宣伝同盟を代表してフレイナ、リュトヘルス（S.J. Rutgers）、ロヴィチ夫人（J.C. Rovitch）の連名による、さらに『HM』を代表してメニショイ（А.Г. Меньшой）の署名による、各人民委員会議宛電報においても赤衛軍創設とそれへの指示要請が主題であった⁽⁷⁷⁾。

このアメリカ赤衛軍運動は、選抜徴兵法によるロシア市民のアメリカ軍徴募への言わば対抗運動であった。1918年2月28日、フレイナが議長を務める大衆集会在ニューヨーク市で開催され、2千名以上がドアまで埋まり、同数以上の外の人々が野外集会を開いた。両方ともドイツ専制に反対するロシア革命の大義へ「道徳的、精神的、そして物質的な」支持を誓った。閉会を前に、義勇兵志願の求めに応じて参加者が壇場に押し寄せ、約500名が登録し、会議後その数は増した。基金も553.98ドル集まった。会議後、社会主義宣伝同盟を代表してフレイナがウィルソン大統領へ打電した。「大衆集会に集まった2千名の労働者と社会主義者は、ドイツ帝国主義に対してロシアで兵役につくため選抜徴兵法下の兵役によらぬアメリカ赤衛軍の徴募をあなたが許可することを求める」と⁽⁷⁸⁾。

あとはアメリカ政府の許可を待つだけだったが、その許可願は、翌3月半ばブレスト-リトフスク条約の全ロシア・ソヴェト大会での批准を機に、アメリカ陸軍省によって拒否される。3月25日のフレイナの反論、すなわち「ユダヤ人の歩兵大隊がこの地でパレスティナにおける兵役のために、またポーランド人の軍団が明らかに〔アメリカ〕政府の許可を得てフランスにおける兵役のために組織された。なぜロシアのためのアメリカ赤衛軍はそうでないのか」にもかかわらず、同運動は弾圧強化をめざす政府の断乎たる拒絶の態度に対して変更を迫りえず、どうにも前進できずに終わる。が、当の人民委員会議からの応答が得られなかったのは、それらの電報が遮断されたからであった⁽⁷⁹⁾。

話を在米ロシア人全コロニー大会に戻して、2月3日朝の会議でも、ロシア人コロニー組織の在米ロシア正式代表への関係についてヴァインシチェインが、ロシアでの政権交代により現在いかなる公式の駐米ロシア代表もいない、ロシアから新大使が到着したとき落ち着く、アメリカ政府はロシア新政府を承認すべきだ、と報告した。それに対して、社会民主主義者ニューヨーク・グループは反論して、現在のボリシェヴィキ政府は革命家を逮捕し、社会主義新聞を閉刊に追いやっている」と反論し、会議は紛糾し中断した⁽⁸⁰⁾。

最終日にロシア人コロニー中央委員会が選出され、翌2月5日に19名の名が報じられているが⁽⁸¹⁾、それは統一組織委員会メンバーから2名だけが抜け、新たに13名が加わった顔ぶれであり、曲がりなりにも「大会はロシア人コロニーを統一した」。「これは合州国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりであ」った⁽⁸²⁾。

さらにロシア人労働者コロニー組織形態についても、在米ロシア人全コロニー大会で以下の計画が採択された⁽⁸³⁾。

1) 地域でロシア人住民とともに労働者代表ソヴェトが創設される。

2) 諸ソヴェトは合州国およびカナダ・ロシア人労働者コロニー代表ソヴェト連盟 (Федерация Советов—депутатов рос. рабоч. колонии С.Ш. и Канады) [すぐあとの表記では、ロシア人コロニー労働者代表ソヴェト連盟] に合同する。

4) 連盟の最高機関であるのはソヴェト大会である。

5) そこで選ばれた委員会がソヴェト執行機関であり、連盟執行機関であるのはソヴェト大会で選ばれた委員会である。

6) この組織計画の実現およびそれにもとづいてソヴェトが創設されるであろうところの原理原則の詳しい仕上げは、第1回在米ロシア人全コロニー大会で選出された執行委員会に委任される。

その執行委員は、上述の19名から成り、焦眉の仕事の遂行のために5名からの書記局が選抜され、そしてロシア人労働者コロニーの利益擁護のため非政党的公式機関紙を創刊することなどが決められた。

本大会の評価に関して、司法省は本大会の目的がいわゆるロシアソヴェト

共和国およびその根本方針と戦術を是認し、堅持し、あるいは支持するところの在米ロシア人組織および党のヨリ密接な同盟を確保することであったと捉えたが⁽⁸⁴⁾、それはあまりにボリシェヴィキ政権との関係に注意が向けられすぎて、コロニー統一の試みというヨリ広範囲にわたる運動であったことへの認識が浅い把握であった。

同様に、否、それ以上に『ニューヨーク・タイムズ』1918年2月5日号は「ボリシェヴィキは当地の労働者を管理することを決める」という見出しの小記事で「アメリカはいまやボリシェヴィキ・ブロックを持つ」ことになった、との偏向報道を行った⁽⁸⁵⁾。

この在米ロシア人移民の歴史において初めて団結の始まりであるロシア人全コロニー大会および労働者代表ソヴェト創設の試みの中に、「国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の『集合性』を時には創造しうる主体的・能動的存在」（前篇注1参照）の可能性をみることはできないであろうか？

2) 第2回ロシア人全コロニー大会まで

その労働者代表ソヴェトは直ちに創設されなかったが、ニューヨークのロシア人労働者コロニー代表ソヴェト招集に関する臨時委員会が1918年4月初めに発表した声明によれば、こうである⁽⁸⁶⁾。第1回在米ロシア人全コロニー大会は、在米ロシア人労働者の組織形成期の最も適切でしかるべき要求および課題として「ロシア人労働者コロニー代表ソヴェト」を提起した。この大会決定の実現において、3月21日に大会執行委員会書記局によって招集されたニューヨーク労働者代表会議が開かれた（22組織から14代議員が出席）。討議後、ニューヨーク市とその近郊のソヴェトの組織形態が採択され、上記臨時委員会が選出され、そしてニューヨーク・ソヴェトの最初の創設集会が4月11日午後8時に開催されることになった。

1918年7月1日に公表された第1回ロシア人全コロニー大会執行委員会書記による全労働者代表ソヴェトおよびソヴェトに未だ組織されていない個々の組

織への書簡によって、以下の問題の討議が呼びかけられた。1) いつ大会を招集するか? / 2) この大会はあなたがたの考えでは、どこで行われるべきか? / …… / 10) ……。そして第1回全コロニー大会執行委員会総会が7月後半に行われるので、回答の期限が7月15日までとされた⁽⁸⁷⁾。

しかし、この運動の進展には困難が立ちほだかり、それは1918年9月9日の『HM』に載ったグールヴィチ論文「ニューヨークにおけるロシア人労働者コロニー内の分裂によせて (二つのソヴェトの形成)」に垣間見られる (ただし、編注が最初にあり、筆者自身が同紙書記であったにもかかわらず、編集部はこの問題への見解を控える旨が記されており、微妙な問題があった)⁽⁸⁸⁾。すなわち、ニューヨークの労働者コロニーで起こっている分裂は、今ロシアで起こっている勢力範囲を決める類似のプロセスの反映にすぎない。このプロセスは一方にボリシェヴィキが、他方に「動揺している」分子がいる。[第1回ロシア人全コロニー] 大会はロシア人コロニーに最小限で妥協的な政綱を与えたが、しかし、勢力範囲を決めるプロセス (процесс размежевания) は止まることができず、止まらなかった。ロシアで始まったこのプロセスは、在米ロシア人労働者コロニーの中でどんどん進行した。ニューヨークでは二つのソヴェトが形成され、それがこのプロセスの始まりである。このプロセスは、ロシア労働者コロニーの頑丈な政治的成長、階級的自覚と自決の成長の指標にすぎないからである、と。

要するに、ロシア10月革命による社会主義陣営内の政権交代で、新政権を支持するか、前臨時政権を支持するか、あるいは (とくにプレスト-リトフスク講和条約交渉・締結・批准以来、新政権との対立を露わにしつつあった) ロシア・アナキスト陣営をどうみるかなど、ロシア国内の対立が、在米ロシア人労働者運動に直に影響を及ぼしたのである。

ほぼ同時期に発された第1回ロシア人全コロニー大会委員会による日付のない文書に、「革命的ロシアは危機に瀕している。……国際プロレタリアートの支援だけがロシア社会主義共和国を救うことができる。……アメリカに存在するあらゆるロシア人革命的組織をして力強い方法で抗議を表明させよ」とあつ

たように、在米ロシア人労働者にとってロシア革命の帰趨は他人事ではなかった⁽⁸⁹⁾。

MIDの1918年9月23日付覚書によれば⁽⁹⁰⁾、合州国およびカナダ労働者コロニー代表ソヴェトは、まずニューヨーク市で労働者・農民ソヴェトとして組織され、組織の長はブライロフスキー（А. Браиловский）、ビアンキ、ヴァインシチェインがなり、そして機関紙『労働者と農民』1918年6月26日号が英語〔ロシア語の誤り〕で出たという。MIDは、1918年5月末以来ブライロフスキーとヴァインシチェインがかなりの金額を自由に使えることは全く明らかだったとみて、ボリシェヴィキ〔政権〕からの資金提供があったのではないかと推定している。確かに1918年5月12日付密偵報告には、『HM』が「突然ある知らない源から財政援助を受けたとの噂」が記されていたが⁽⁹¹⁾、しかし少なくともブライロフスキーについてはあてはまらない。

ブライロフスキーがMIDに自ら語り、1919年1月20日に作成された報告によれば、彼は1905年革命後ロシアを逃れ、数年間フランスに住み、大戦中に合州国に到着し、『HM』で推定月額200ドルという高給で働き、そのほかに原稿料も支払われた。〔同紙編集委員会は徐々にメンシェヴィキからボリシェヴィキ共鳴者へと多数派が交代し〕1918年〔5月か6月〕に高給取りでもある彼は去ることとなり、『労働者と農民』の創刊に加わり、同編集者となった⁽⁹²⁾。

このブライロフスキーの略歴からも垣間見られるように、労働者・農民ソヴェトおよび同機関紙『労働者と農民』は、『HM』スタッフとそこからの離脱者、そしてURWメンバーの三者間の対立を孕んでいた。早速、半年の間に以下で述べる労働者代表ソヴェトの分裂を引き起こすのだが、ここでは発行部数が4,000部であった『労働者と農民』の編集スタッフの変遷に触れておく（ただし、機関紙未見のため、アメリカ官憲史料に拠っている）。

1919年5月までにブライロフスキーは編集者から降り、経営責任者ユムシャノフ（S. Youmshanoff）、編集者マヌセヴィチ（A. Manusevich）らに交代した。その後、編集スタッフにコルネエフ（M. Korneev）やオクンツォフまでも名を連ねている⁽⁹³⁾。

1919年11月司法省による襲撃はURWの本拠地、人民の家を中心になされたが、同所を発行所としていた同紙は一時停刊させられた⁽⁹⁴⁾。が、1920年1月末時点で一新された3名の編集スタッフの官憲報告がある(補章参照)。

『HM』1918年10月10日号に載ったアメリカ社会党ロシア人部連盟大会の決議の一つに以下があった⁽⁹⁵⁾。在米ロシア人労働者代表ソヴェトとの関わりについて、「大会はロシア社会主義支部に、その中で社会主義者がそのようなソヴェトをうまく社会主義組織へ転化することを自らの最終目的としながら多数派であるところの、そのソヴェトにおいて自らの活動を続けることを勧める。しかし、社会主義者が少数派であり、社会主義的活動が可能でないところのソヴェトの隊列から去ることを勧める」と。同連盟にとって、同ソヴェトはあくまで政争の具としてしかみられていなかった。

ニューヨーク州政府の1918年12月5日付報告をみると、『HM』の指導者、つまりヴァインシチェイン、グールヴィチらと、ブライロフスキー、ニューヨーク・ソヴェト指導者らの「二つのグループが知られない理由で大衆に対して協力して働かないのは公然たる事実であり、ブライロフスキーが旧ロシア政府を代表する或る人物のために働いていると疑われているので信用されえないことについて公然と語る者さえいる、とある⁽⁹⁶⁾。

シカゴでのソヴェトの動きも二つのMID報告に記されていた。一つは、シカゴのソヴェトが機関紙『ラボーチー』(Рабочий)を刊行しはじめ、それはニューヨークの『HM』と似た中西部におけるポリシェヴィキ党の公式機関紙として認められている、との1918年10月30日付報告である⁽⁹⁷⁾。もう一つは、1918年11月10日にソヴェト主催でロシア・ソヴェト政府創立1周年を記念して開かれ、約1万人がホールにあふれかえった大規模な大衆集会の報告である。5名の演説者の中にはストクリツキーもおり、目下防諜法違反で起訴されていたエングダール(J.F. Engdahl)は、ドイツ革命勃発の報を受けて次のように結んだ。「近い将来、我々は合州国のソヴェト共和国を見るであろうことを希望しよう」と⁽⁹⁸⁾。

ニューヨーク労働者代表ソヴェトは、機関紙『労働者と農民』24号(1918年

12月6日）に大会問題についての声明を出し、1919年1月6-9日に〔第2回〕全コロニー大会を招集するために動きはじめた。

この動きは、『HM』1918年12月14日号に載った「アメリカにおけるロシア人労働者コロニーによせて（ニューヨーク・ソヴェトによる『全コロニー』大会の招集に関して）」で次のように批判的に論評された⁽⁹⁹⁾。『労働者と農民』24号の中で第1回大会執行委員会との交渉の「歴史」、つまり、ソヴェトに「執行委員会と絶交する」よう駆り立て、第2回大会招集に関する活動を独自に行わせるに至る経緯が述べられている。第1回大会執行委員会のイニシヤティブで1918年4月に形成されたニューヨーク・ソヴェトの多数を占めたのは、URWおよび非政党組合組織の代表であり、つまりアナルコ-メンシェヴィキの分子からなる多数派は、ボリシェヴィキ-社会主義少数派との闘争を導いた。その結果、ソヴェトの社会主義少数派はそこから去り、社会主義者の会議を形成した。ニューヨーク・ソヴェトは、これで安心せず、執行委員会から第2回全コロニー大会の招集権を剥がしはじめた、と。

ニューヨーク・ソヴェトへの1回大会執行委員会の約半数メンバーによる批判声明が続いた⁽¹⁰⁰⁾。それは第2回大会への招集権を同執行委員会が同ソヴェトへ委任したことを否定し、『労働者と農民』がソヴェトの機関紙であることへの疑念も表明した。同紙数号の政治的内容や掲載された情報を注意してみると、ほとんど専らURWの諸要求を取り扱っているにすぎないとして。

両陣営が激突した1918年12月27日の大衆集会の詳しい密偵報告には、こうあった⁽¹⁰¹⁾。私〔共産主義陣営に潜入していた密偵N-100〕は『HM』から電話で呼び出された。ヴァインシチェインは私に大衆集会が今晚ロシア・アナキストによって開かれるであろうことを語った。そこで彼らの指導者ビアンキが、ロシア・ソヴェト共和国に対する自分たちの態度表明案を作り上げるため、またこの国における革命的プロパガンダの永続的な形態を確立するため、在米全ロシア人急進的諸組織国際会議を招集する必要性について語るであろう。そしてビアンキは、上述の会議に参加することを拒否しているアメリカのロシア・ボリシェヴィキ連盟〔ロシア人部連盟〕を攻撃するつもりだ。それ

ゆえヴァインシチェインは言った。我々はその会議に行き、大衆の前に我々の政綱と計画を口授しなければならない。そのような会議は在米ロシア人全コロニーによってではなく、3,000名以上ではないメンバーをもつアナーキスト系のURWによってのみ代表されるであろう、と。

私はヴァインシチェインとともに〔会場である〕人民の家に向いた。ヴァインシチェイン、次いで私がビアンキに反対した。討論は双方の側に対していかなる成果もなしに翌日午前2時まで続いた。

1919年1月6-9日、第2回合州国およびカナダ・ロシア人全コロニー代表者大会はニューヨーク市マンハッタン公会堂で開かれた。1月6日午後3時、『労働者と農民』編集者であり、MID報告が「大会の主導者 (the moving spirit) であった」と評した⁽¹⁰²⁾ ブライロフスキーの演説で開会した。

会議の中身は今のところほとんど『HM』の紙面でしか知りえないが、同紙は議事内容を詳細に報じる中で、組織によって代議員選出の基数が大幅に異なるという不公正や、反ソヴェト・ロシア政府感情の一部表出などを批判した⁽¹⁰³⁾。

同紙が報ずる報告者の一人の表明によれば、大会は33,777名（ただし、以下の内訳を合計すると33,787名となる）のロシア人労働者を代表する118名の代議員が集まり、その内訳はこうだった（ただし、既述のスピアの報告ではわずかな違いがあり、36,975名を代表する123名の代議員とあり、以下の丸括弧内の数字がスピア報告によるものである）。

1) 58 (60) 名が25,425名の非政党的労働組合を代表して〔438名で1代議員選出〕

2) 48 (49) 名が7,738名のURWを代表して〔161名で1代議員選出〕

3) 7 (9) 名が495名の「社会主義者」を代表して〔71名で1代議員選出〕

4) 2 (2) 名が85名のIWW員を代表して〔43名で1代議員選出〕

5) 3 (3) 名が44名の生粋のアナーキストを代表して〔15名で1代議員選出〕⁽¹⁰⁴⁾

各末尾の角括弧内は、『HM』のデータで代議員の各選出単位を出してみたものだが、『HM』が批判するように、代議員選出の基数のバランスがなぜこ

うも違いすぎるのであろうか。しかもアナキストがもっとも有利な選出となっている。

「先年、〔第1回全コロニー大会で〕ポリシェヴィキが勝利した。この大会において（……）あなたがたポリシェヴィキは、破局を恐れた。……たとえ革命的組織が政治に関心をもつとしても、コロニーは全体としてこれに興味をもたない」。この発言に対して、『HM』は次のように論評した。もちろんペルクスは、ロシア社会主義連盟の真のポリシェヴィキがこの大会へ参加することを拒否したことについて沈黙している、と⁽¹⁰⁵⁾。

ペルクスの方も、「我々をアナルコ-メンシェヴィキと呼ぶことをやめる要求を『HM』に送ることを提案し」たが⁽¹⁰⁶⁾、この問題に関する限り、同紙にはない（同紙による大会報道は「アナルコ-メンシェヴィキ大会において」という不適切なシリーズ・タイトルの下でなされた）。両者の対立は激しくなるばかりであった。

大会から去った左翼エスエルの2代議員からの「なぜ我々は大会を去ったか？」の声明文が『HM』に載った。すなわち、全コロニー大会は、合州国およびカナダのコロニーの気分と願望を代表していないし、表していない。我々が大会による社会主義ソヴェト政府への全般的関係の明確化を要求したのに対して、大会はソヴェト政府への敵対関係を露わにする恐怖心から回答を拒絶した、と⁽¹⁰⁷⁾。

確かに、ピアンキらは「ソヴェト政府の承認に関する問題の投票を棄権した」。「我々はいかなる政府も認めないし、あらゆる権力および国家の形態も否定」しているからとの理由をピアンキは挙げているが⁽¹⁰⁸⁾、それだとソヴェト政府承認への反対投票があってもよさそうだ。左翼エスエル代議員の判断の方がより説得力があるものの、むしろ回答拒絶の中に「共同」の可能性が残されていたとみられないか。スピアの報告では（おそらく警戒心も働いたからであろうが）、「URWはポリシェヴィキをその反革命との闘争において支持することは可能であることを知っている。なぜならばポリシェヴィキは疑いなくロシア社会民主党の最も革命的な部分であるから」と判断されていた⁽¹⁰⁹⁾。

なお、本大会は第2回執行委員会の名で数日遅れの1月13日にウィルソン大統領宛電報を打った。それは長文だったが、「ロシア人民の獲得物を無にするための」連合国軍によるロシア武力干渉への抗議に絞ったものであった⁽¹¹⁰⁾。

この第2回大会における鋭い意見の対立は、モスクワのコミンテルン本部にも深刻な波紋を引き起こした。コミンテルン執行委員会を代表してメニショイとバールジン（Я.К. Берзин）による以下の内容の書簡が、使者によってモスクワから合州国へ届けられることになった⁽¹¹¹⁾。

『HM』がボイコットした第2回ロシア人全コロニー大会についてのあなたがたの口論と誤解について我々は聞いたばかりだ。コミンテルン〔執行委員会〕ビューローは、あなたがたの闘争が原則の問題にもとづいていないことを知っており、すべての口論と闘争の即時終結、両誌『HM』と『労働者と農民』を一つに即時接合すること、そしてソヴェトと党活動の即時共同をあなたがたに要求する。

あなたがたはソヴェト政綱にもとづいて多数の移民労働者の共同をめざし、アメリカの世論へ影響を及ぼすこと（情報活動）とアメリカ労働運動へ影響を及ぼすこと（煽動活動）を試みなければならない。これらの目的はあなたがたの中に口論と誤解がある限り不可能だ。コミンテルン・ビューローは、ソヴェト政綱にもとづくすべてのグループの合流を主張する。ソヴェトと共同する希望を表明するアナーキスト、かつてのメンシェヴィキ、インテリゲンチヤは拒絶されてはならない。

末尾に挙げた諸グループに対してコミンテルン本部自体が共同どころかほとんど敵対していくのだから、本書簡は説得力をもちようがなかったろう。

この後の史料は見つけがたく、ラスク委員会には1919年8月24日ニューヨーク市で開かれた統一ロシア人諸政党内閣の密偵報告がある。すなわち、午後1時に開場し、午後2時半には約250名が集まり、その大多数は急進主義者、とりわけアナーキスト系とIWWであった。午後3時にグリクスタス（L. Grikstas）とロシア・ソヴェト評議会〔ママ〕からのユムシャノフがホールに入って来て、会議を招集することが決定された。代議員が前方へ移り、信任状

が集められ、記録された。大半をURWの支部が占め、その他に共産党〔正式にはこの時まで共産党は創立されていない〕ブルックリンから3代議員とか、第2回ロシア人全コロニー大会執行委員会から3代議員とかがいた。

グリクスタスが登壇して次のように語った。同志たちよ、会議の目的は我々の政府にソヴェト・ロシアの封鎖を解除させることである、この国には1,400万人以上のロシア人がいて帰国を欲している、と。そして彼が議長に選ばれた。

ペデリスキー（Pedelsky）が、我々は在米ロシア人コロニーを統一するであろう一評議会を組織しなければならない、など4項目のプランを示した。が、これにグリクスタスが反撥し、議長を一端は降りたが、再選され、それでも議長を放棄し、ロシア人水兵同盟のコルネエフが議長となった。その後、19人委員会が選出され、翌日集まって更なるプランを立てることとなって、午後7時に閉会した。

密偵報告のまとめは、以下のように誇張されていた。この運動は非常に深刻なものであり、それは遅滞なく果たされるにちがいない、というのはこの国とカナダのすべての産業に重大な効果を及ぼすであろうから。急進主義者は力を獲得し、それによって重大な危機を引き起こすであろう、と⁽¹¹²⁾。

第2回全コロニー大会のわずか7カ月半後の会議であるが、アナーキスト指導者の顔ぶれは一変しており、密偵の予想に反して、在米ロシア人コロニーの統一はますます遠ざかりつつあった。

3) 第3回ロシア人全コロニー大会まで

1919年11月のURW弾圧後、1920年のURW再組織化の動きについては、すでに補章で考察した。そして1921年に入って合州国・カナダ・アナーキスト-共産主義諸グループ連盟とは敵対する、補章で言及したミハイロフの属するグループによって、3月6-9日にニューヨーク市アストリアル・ホールで第3回ロシア人全コロニー大会が開催されることになった。その議事内容については、詳しい（と言っても網羅的ではない）密偵報告および同決議報告があるので、それらによって以下紹介していく⁽¹¹³⁾。

大会には1万人〔誇張であろう〕を代表する37組織から34代議員が集まり、各自40ドルを預け金としたため、収入は1,360ドルとなり、そのうち512.24ドルが開会時に使われていた。3月6日正午の開催にあたって「パーマーの密偵がロシア人急進主義者を一斉検挙するのになお非常に活動的であり、討議中いかなる革命的な演説もしないよう」との注意が予め促されたが、後述するように、それは守られなかった。

最初に議長団、書記団が選出されたが、顔ぶれは一新されていた。続いて、14の議事日程が採択され、おおよそそれに沿ってみていくと、まず議題2「第2回全コロニー執行委員会報告」について。同委員会のコルネエフ、ユムシャノフら4名は、この第3回大会が規則に則って招集されず、合州国とカナダの大多数のロシア人組織を代表していないとの理由で、同委員会の活動報告を出すことを拒んだ。そこで、かつて同委員会メンバーであったミハイロフがその活動報告をし、その中でいかなるほんとうの活動もなされなかったと述べた。決議の中の第一項目でも「第2回全コロニー大会執行委員会は、その機能を停止しなければならない」と表明されたが、明らかに開催手続上の問題があった。

議題3「ロシア人労働諸組合および教育諸協会執行委員会報告」では、URW襲撃後、1920年2月1日にカジノ・ホールで招集された会議で同組合・協会が組織されたが、自ら認めるように、司法省によって粉碎された組織を未だ再組織化することができていなかった。また同報告によれば、『アメリカンスキエ・イズヴェスチャ』は同組織の管理へと引き継がれたとのことだが、停刊を経験し、財政逼迫の状態であった。

議題4「ロシア人およびアメリカに残っているロシア市民孤児のロシアへの移送」は、本大会の「主要問題」と位置づけられていた。「移送委員会は、もしも彼らが1,500人をロシアへ移送するすべての費用を賄うであろう10万ドルが調達できるならば、1隻の船を借り上げることが可能だとわかった。また1,000人が各々100ドル支払う用意をするならば、あと500人無料で連れて行くことができるだろう」との報告があったが、決議では具体的提案は盛り込まれなかった。

引き続き関連して、政治囚および国外追放者の擁護のための委員会報告があり、それによると、同委員会はこの14カ月の間700以上の事例を取り扱い、費用は13,987ドルかかり、3,000ドルの赤字であり、その赤字の清算が求められた。

議題7「労働者新聞」においてミハイロフが、いかに『労働者と農民』および『パンと自由』が刊行されたかを説明した。すなわち、「あまりに知的すぎたこと」が両紙の衰退の原因であり、最終的に司法省によって停刊に追いやられた。第2回全コロニー執行委員会のいく人かのメンバーが、もう一つの労働者新聞を開始することが緊急であると決定し、『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』を組織した。創刊号のあと司法省に襲撃され、編集者がたたかれ、2、3日停刊を強いられたが、のちに同紙は他の同志によって組織され、定期的に発送されている、と。

続いて、いかなる政策が将来、同紙によって採られるであろうかについて全体討論があり、再びミハイロフが、「同志諸君、あなたがたすべては我々がアナキストであることを知っている。なぜ我々は学校やさまざまな教育的協会を組織することによって我々の信念や教義を、しかも『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』に適用されるそれを包み隠すべきであろうか。きっぱりと我々は、それはアナキストの新聞であると明瞭に言うべきであり、その真の性格と目的を明確に確立すべきである」と主張した。

早速、議長が「革命的表現を控えるよう」命じたけれども、今度は共産主義者から唯一出席していたデトロイトのシヴコ（E. Sivko）が「あなたはアナキストだ、それじゃあ私は共産主義者だ。もしもあなたがアナキズムの政策を要求するならば、私は共産主義のそれを要求し、そしてアナキズムのプロパガンダが『アメリカンスキエ・イズヴェスチヤ』を通じて教えられることに決して同意しないつもりだ」。同様に議長から注意されたにもかかわらず、シヴコは、もしも同紙にアナキズムのプロパガンダを公表するならば、共産主義の理論家を招いて自らのプロパガンダを同紙に書かせなければならない、と提案した。

結局、あらゆる代議員が同紙を非政治的に取り扱う案に満足したわけではな

いと了解をもって、議案作成を委員会に委ね、決議では、組織を代表することは控えさせるが、同紙へヨリ多くの寄稿者を請い、内容を改善しながら継続することを推薦することとなった（ミハイロフはその決定に不服で、同紙の編集者を辞任することを公言した）。

このやり取りをみる限り、アナーキストと共産主義者との溝はもはや埋まりそうもない。かかる政治路線をめぐる対立は、議題10「ソヴェト・ロシアに対する我々の関係」でも表面化し、キン（Kin）によるポリシェヴィキ非難に対して、シヴコが反論の機会を求めたが、その機会を代議員たちは彼に与えず、大会はほとんど分裂寸前となった。が、議長が秩序を保つのに成功した。議案作成委員会に、ソヴェト・ロシアを歓迎するが、いかなる独裁の形態をも非難する議案作成が指示された。

議題12「合州国およびカナダのロシア人コロニーの統一」については、何らの言及もない。たとえ討議があったとしても、話が進展しなかったのではなからうか。

同大会は11名から成る執行委員会を選出することになり、同委員会は月間報告を印刷して出し、また3カ月毎に招集される地区の革命的諸組織会議によって管理されることになった。ロシア人の移送問題に関しても、「出発するつもりであるところの人々の政党やグループの組織化を企てるであろう地方における委員会の形成を推薦する」とか、「地方の急進的・革新的組織を管理する委員会を合州国のニューヨークに一つとカナダに一つ創る」とか決議しているが、上述のような政治的対立や政府による弾圧下での困難な運動の中で、掛け声倒れに終わらざるをえなかったろう。

本章のまとめをしておこう。

ロシア2月革命勃発後、在米ロシア人政治亡命者ないし移民は、帰国準備および革命政権支援のため、ロシア人市民のアメリカ軍選抜徴兵の動きへの対処のため、そして駐米新ロシア大使バフメチェフとの関係をどのように結ぶかの検討などのため、アメリカ国内での組織統一、つまり在米ロシア人コロニー統一を求める運動を急激に展開していった。その試みは当初、①（口火を切った

クリーヴランド社会主義・労働者組織と合同した）ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部、②URWの指導部を占めたアナキスト・グループ、③パフメチェフを支持する市民グループの間で試行錯誤された。三者によって統一組織委員会が設立されたが、すぐに③は独自に統一ロシア人組織中央委員会を設立した。出発支援および選抜徴兵に対するロシア大使の対処の生ぬるさを批判する①と②は、ロシア人全コロニー大会の共催を模索して③の中央委員会と折衝したが、最終的に③の参加を断り、1918年2月に第1回ロシア人全コロニー大会を開催することになった。

大会はロシア国籍保持者の徴兵不可などの決議とともに、ロシア人労働者コロニーの組織形態として労働者代表ソヴェトの創設、諸ソヴェトの連盟形成およびソヴェト大会の計画をも採択した。大会は「在米ロシア人移民の歴史において初めて」曲がりなりにも「ロシア人コロニーを統一し」、「これは合州国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりであ」った。一度は「工場街の煙の中へと消えた」民族的アイデンティティが、主体的・能動的なアイデンティティとして復活しつつあったと言えるのではないか。

次に、第1回大会で主導権を握った①社会党ロシア人部と、②URWアナキスト・グループとが、同ソヴェト創設の試みの中で対立した。ニューヨークで率先して創設された同ソヴェトは、今度はアナキスト・グループに主導されることになり、1919年1月に同グループによって第2回ロシア人全コロニー大会が開催されることになった。この対立は、今ロシアで起こっている「勢力範囲を決めるプロセス」の反映であった。

大会をボイコットした①は、アメリカ共産主義政党創設へ注力していった。他方、②は大会で新執行委員会を選出したが、その中でも対立が生じ、1年半の間をあけて（再組織化されたURWを財政的に継承した）合州国およびカナダ・アナキスト-共産主義諸グループ連盟とは敵対するグループだけが強引に第3回ロシア人全コロニー大会を1921年3月に開催した。そこでも一方で自分たちと共産主義者との政治的対立・分裂を繰り返し、他方でコロニー統一

どころか帰国工作も実質的に進められなかった。これ以後、在米ロシア人コロニーの統一運動は終熄していったものとみられる。

第3章のロシア語新聞の紙面分析で明らかにされたように、1921年初めの段階では在米ロシア人移民のソヴェト・ロシア政権への支持ないし中立的関心の高さは依然保たれていた。一般読者以上にロシア人移民労働者にとって、ロシア革命の帰趨は他人事ではなく、重大な関心事であった。良くも悪しくも革命ロシアでの対立関係が彼らの運動に大きな影響を及ぼさざるをえなかった。在米ロシア人コロニー統一の試み自体がその対立関係の波をもろにかぶり、アメリカ政府による弾圧下で四分五裂していった。

結局のところ、在米ロシア人コロニーの統一をめざしたロシア人移民労働者の中に、(ロシア革命を機にその可能性が高まった) トランスナショナル・アイデンティティの形成をみるには、(これまた革命が引き金となって生じた) 多くの内的・外的阻害要因がありすぎたと言えよう。

最後に、在米ロシア人コロニー統一の眼目の一つであった在米ロシア人移民労働者の帰国の規模について付記しておく。

ロシア2月革命勃発後1921年にかけて、どれほどの在米ロシア人移民労働者が帰国したかについて確たるデータを詳らかにしえない。野村達朗によれば、1917年から1920年にかけて2万人以上の「ロシア人」(大半はユダヤ人)がアメリカを離れたが、しかし圧倒的多数はアメリカにとどまった、という⁽¹¹⁴⁾。

しかし、受入側からタルレ (Г.Я. Тарле) の調査によってそのデータをみていくと、その規模はヨリ大きかったと認められる。すなわち、労働人民委員部の情報によれば、1920年9月から1921年9月までのアメリカからの移民は、10,130人である⁽¹¹⁵⁾。しかも、その数は限定されたものであろう。というのは、駐米非公式ソヴェト・ロシア代表マルテンスの把握では、1920年末〔厳密に訳すと、最後の複数月〕から1921年初め〔最初の複数月〕にラトヴィアのリアパーヤ (リバウ) を経由して入露したアメリカからの移民は、16,000人以上であり、別史料でも、1921年2-3月も同様に16,000人であった。さらにマルテ

ンスは、1年間でアメリカから入露した労働者が10万人の可能性のあることを確信的に表明した⁽¹¹⁶⁾。

1921年9月までにモスクワとペトログラートで登録されたアメリカからの移民労働者は、10,130人であった。そのうち、企業に派遣された熟練工が26%、企業・国営農場に派遣された農民・労務者が17%、そして故郷に戻った農民・労務者が51%であった⁽¹¹⁷⁾。

データが断片的で、民族別データでないけれども、1920年から1921年にかけて10万という数字は、在米ロシア人移民労働者とその扶養家族を含めたものとして必ずしも誇張された数字ではないのではないか。ロシア2月革命報道直後の1917年5月だけで約2,000人の移民がロシアへ向けて出発したというし⁽¹¹⁸⁾、また1920年11月までにアメリカにおいて出発のために申請・登録した者が6万人いた、との同じくタルレの調査からみても、そうであろう⁽¹¹⁹⁾。

仮にロシア2月革命勃発後数年間ロシアへ向かったユダヤ人を含むロシア人の出国者数を10万人と推定して、それは同時期のアメリカへの亡命者数約3万ないし4万人（前篇40頁）の約3倍に達するものであったろう（同じく6万人と推定しても約2倍となる）。

1920年の人口調査にもとづくカーペンターの研究によれば、その年外国生まれの白人のうちロシア人は1,400,489人で、そのうちロシア語を母語とするのが361,843人（25.8%）である。また外国生まれの白人のうちロシア語を母語とするのが392,049人もある⁽¹²⁰⁾。いずれの人数にもかなりのユダヤ人が含まれると注記がある、といっても上記1,400,489人のうち56.5%にあたる791,181人がイディッシュ語・ヘブライ語を母語とするとの別区分もあるので、30万台がロシア人の最大数と推定される。それとロシア人の出国者数を比べられればよいのだが、仮に30万人と（上記10万人にロシア語を母語とするロシア人の比率25.8%を機械的に乗じた）約2.6万人を比べて、後者が占める比率（約8.7%）は無視できるものではなく、「圧倒的多数はアメリカにとどまった」とは言い切れない。

ロシア人の帰化を取り上げれば、既述（前篇44頁）のように、1920年の人口

調査でそれは40.2%まで急上昇した。あくまでも目安としての試算だが、その年のロシア人が実質30万人として約12万人が帰化したことになる。もしも約2.6万のロシア人が帰国しなかったならば、その帰化率は12万人を32.6万人で割るので、36.8%となり、3.4ポイント減少するだろう。それでもロシア人の帰化率が1920年の「新」移民の平均帰化率26.6%⁽¹²¹⁾よりなお10ポイント高いのだが、その中には、合州国政府による弾圧下で「レッド」の嫌疑を晴らす一策として(前篇42頁参照)、あるいは政府、報道機関等による反ポリシェヴィキ・キャンペーンが功を奏した場合もあれば、そうでない場合もあろうが、誕生したポリシェヴィキ政権への反撥としての帰化もあったろう。いずれにせよ、残された、または留まったロシア人は、分断された社会体制下で、アメリカ国籍の中で自らのアイデンティティを確立していく方向へ困難な道を歩んでいくことになる。

〔付記〕 本稿は2009～2011年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果の一部である。

〔追記〕 脱稿直前に移民局長年次報告書にもとづいて再計算された以下に抜粋するデータを得た。ロシア人の出国移民数25,272人(ただし、当時の会計年度は7月1日から始まり、ロシア2月革命直後の数字は含まれない)は上記の推定数とほぼ重なるが、なお疑問が残る。すなわち、「ロシア人」にはユダヤ人を含むなどの注記がなく、別項にヘブライ〔ユダヤ〕人があり、期間中のその入国移民数は157,397人であるのに対して出国移民数は2,230人と少なすぎる。本来ユダヤ人はポグロムから逃れて来たとかでアメリカからの再出国者数の割合は入国者数に比べて1908～1922年度全体で5.7%と極端に少なく、「ロシア人」の52.8%と対照をなす。たとえ「ロシア人」の中にロシア語を話すユダヤ人が含まれている可能性があるとしても、それは社会運動家を除けば少なかったのではないだろうか(これに伴い上記推定の根拠が一部成り立たなくなる)。

いずれにせよ、統計自体に困難があるのか、再計算に不備はないのかなどについての確認は、今後の課題となる。

ロシア人のアメリカ合州国への／からの入国／出国移民数
(1917～1921会計年度)

	1917	1918	1919	1920	1921	1917～1921
入国移民	3,711	1,513	1,532	2,378	2,887	12,021
出国移民	6,393	4,926	1,717	1,151	11,085	25,272
増減	-2,682	-3,413	-185	1,227	-8,198	-13,251

[*The Immigration Problem in the United States* (National Industrial Conference Board, Research Report No. 58) (New York, 1923), pp. 123-130.]

注

- (1) Records of the Federal Bureau of Investigation [1908-1922], RG 65 [hereafter cited as Records of FBI], File No. BS202600-184, National Archives and Records Administration [NARA], Washington, D.C.
- (2) *Голос Труда. Безпартийный орган русских рабочих в Америке* (New York), No.1, 1.III.1911, 1, 4. 本誌のコピーは田中ひかる氏より提供を受けた。
- (3) R. Schmidt, *Red Scare. FBI and the Origins of Anticommunism in the United States, 1919-1943* (Copenhagen, 2000), 249.
- (4) Records of FBI, OG341761; Correspondence of the Military Intelligence Division of the War Department General Staff, 1917-1941, RG 165 [hereafter cited as Correspondence of MID], 10110-1683-24, NARA.
- (5) Cf. Schmidt, 301-303; L.F. Post, *The Deportations Delirium of Nineteen-twenty. A Personal Narrative of an Historic Official Experience* (Chicago, 1923).
- (6) Schmidt, 20, 299.
- (7) Records of FBI, BS202600-184.
- (8) *Revolutionary Radicalism. Report of the Joint Legislative Committee Investigating Seditious Activities, Filed April 24, 1920, in the Senate of the State of New York* (Albany, 1920), Part 1, Vol.1, 862, 865; Vol.2, 1185, 1448, 2005.
- (9) D. Hoerder (ed.), *The Immigrant Labor Press in North America, 1840s-1970s. An Annotated Bibliography*. Vol.2: Migrants from Eastern and Southeastern Europe (New York/Westport, Conn./London, 1987), 121.
- (10) Cf. Schmidt, 123.
- (11) Records of FBI, BS202600-184.

- (12) Records of FBI, OG360364.
- (13) M. Villchur, “Bolshevism and Russian Here,” *The New York Times*, Vol.68, No.22,422, 15.VI.1919, Section 3, 2.
- (14) 外務省外交史料館, 4.3.2.1-4-4 (2).
- (15) Е.И. Омельченко, *К вопросу об организации российской колонии* (New York, 1917), 6-7.
- (16) Records of FBI, BS202600-184.
- (17) Records of FBI, BS202600-184.
- (18) Correspondence of MID, 10110-1683-14; cf. 10110-1683-15.
- (19) Records of FBI, BS202600-184.
- (20) Records of FBI, OG208369.
- (21) Records of FBI, BS202600-184-10.
- (22) Records of FBI, BS202600-2433.
- (23) Records of FBI, BS202600-2126-44.
- (24) Records of FBI, BS202600-184.
- (25) “Union of Russian Workers/Anarchist Activities” by J.S. Apelman, Detroit, 17.X.1921, Records of FBI, BS202600-345-184.
- (26) “General Summary of Radical Activities in Chicago and vicinity for Week Ending December 25, 1920,” Records of FBI, BS202600-14-26. ただし史料の2枚目(ないしそれ以降)は欠落している。
- (27) “Volna” Resume by M.J. Davis, New York City, 9.VI.1921, Records of FBI, BS202600-345-150.
- (28) Records of FBI, BS202600-184-12; cf. Correspondence of MID, 10110-1683-55.
- (29) *Новый Мир* [hereafter cited as *НМ*] (New York), No.937, 16.III.1917, 1; А.М. Черненко, *Российская революционная эмиграция в Америке (конец XIX в. — 1917 г.)* (Киев, 1989), 180.
- (30) Cf. 山内昭人『リュトヘルスとインタナショナル史研究 — 片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウイング — 』(ミネルヴァ書房, 1996), 154-155, 160.
- (31) М. Вильчур, *Русские в Америке* (New York, n.d.), 98.
- (32) *Голос Труда. Орган Федерации союзов русских рабочих Соед. Штатов и Канады*, No.132, 6.IV.1917, 1; Черненко, 181; Э.Л. Нитобург, *Русские в США. История и судьбы 1870-1970. Этноисторический очерк* (Москва, 2005), 86.
- (33) *Голос Труда*, No.132, 6.IV.1917, 1; Черненко, 180. ニューヨーク市警察署の爆弾対策班長であったタニー (Th.J. Tunney) の証言によれば、34名の第一陣がニューヨークのペンシルヴェニア駅からシカゴへ向かって発ったのは、4月3日であった。Th. Tunney, *Throttled! The Detection of the German and Anarchist Bomb Plotters* (Boston, 1919), 268.
- (34) *Голос Труда*, No.130, 23.III.1917, 1, cf. 3.
- (35) *Голос Труда*, No.133, 13.IV.1917, 1; No.135, 27.IV.1917, 1; *НМ*, No.992, 17.V.1917, 3.
- (36) *Голос Труда*, No.137, 11.V.1917, 1, 4.

- (37) Tunney, 269.
- (38) P. Avrich, *The Russian Anarchists* (Princeton, 1967), 138, 139; В.Д. Ермаков/П.И. Талеров, *Анархизм в истории России. От истоков к современности. Библиографический словарь-справочник* (Санкт-Петербург, 2007), 698.
- (39) *Current History: A Monthly Magazine of The New York Times* (New York), Vol.6, Part 2, No.2, VIII.1917, 266, 269-270, cf. 207-208.
- (40) Е.И. Омельченко/О.А. Корф (E.I. Omeltchenko/O.A. Korff) (chief editors), *Русско-американский справочник/Russian-American Register* (New York, 1920).
- (41) *Ibid.*, 95-135.
- (42) *Ibid.*, 95.
- (43) *HM*, No.998, 24.V.1917, 3; No.1005, 1.VI.1917, 4; No.1010, 7.VI.1917, 1; cf. No.1207, 14.I.1918, 4.
- (44) *Россия и США: дипломатические отношения 1900-1917* (Москва, 1999), 486.
- (45) *Ibid.*, 494-495.
- (46) Омельченко, *op. cit.* 同書は交友団『ノーヴィ・ミール』印刷所で印刷され、その序文の日付は1917年10月22日となっている。なお、「コロニー」は当事者たちが使用した用語だが、その統一の試みは主として地域ごとの諸社会団体の構成員およびそれらから選出された代議員によって担われていく。
- (47) *Ibid.*, 13-14.
- (48) *Ibid.*, 14-21.
- (49) *Ibid.*, 21-23.
- (50) *HM*, No.1130, 25.X.1917, 4; cf. А.Б. Ручкин, *Русская диаспора в Соединенных Штатах Америки в первой половине XX века. Работа выполнена на общеуниверситетской кафедре истории Московского гуманитарного университета* (Москва, 2007), Глава 3, 20-22/87. 本博士論文はインターネットから入手したもので、頁数が印刷によって変わるため、第3章が87頁あるうちの20-22頁目という表記にする。以下同様。
- (51) Н.И. Гурвич, “К созыву съезда российской колонии в Америке,” *HM*, No.1130, 25.X.1917, 4; No.1131, 26.X.1917, 3.
- (52) *HM*, No.1161, 24.XI.1917, 3; No.1163, 27.XI.1917, 3.
- (53) *HM*, No.1177, 10.XII.1917, 3.
- (54) *HM*, No.1198, 3.I.1918, 3.
- (55) *HM*, No.1214, 22.I.1918, 3.
- (56) *HM*, No.1226, 5.II.1918, 3.
- (57) Correspondence of MID, 10058-69-1 (『ルースコエ・スローヴォ』1918年1月31日号よりの英訳)。
- (58) Report on 10.IX.1918, Correspondence of MID, 10058-69.

- (59) Cf. *HM*, No.1227, 6.II.1918, 4.
- (60) Cf. D.S. Foglesong, *America's Secret War against Bolshevism: U.S. Intervention in the Russian Civil War, 1917-1920* (Chapel Hill/London, 1995), Chapter 3; O.B. Будницкий (ред.), 《Совершенно лично и доверительно!》Б.А. Бахметев—В.А. Маклаков переписка 1919—1951, Т.1 (Москва, 2001), 51-83.
- (61) *HM*, No.1347, 27.VI.1918, 2.
- (62) *New York Tribune*, 20.VII.1918, 9.
- (63) *Ibid.*, 25.IX.1918, 4.
- (64) C.K. Cumming/W.W. Pettit (eds.), *Russian-American Relations, March, 1917-March, 1920. Documents and Papers* (New York, 1920), 320.
- (65) Cf. Correspondence of MID, 10110-1194-331.
- (66) Нитобург, 87.
- (67) *Ibid.*, 88; cf. Ручкин, Глава 3, 22-24/87; Y.J. Chyz/J.S. Roucek, “The Russians in the United States,” *The Slavonic Review*, Vol.17, No.51, 1939, 652.
- (68) Correspondence of MID, 10058-79.
- (69) *The New York Times*, Vol.67, No.21,934, 12.II.1918, 18.
- (70) Омельченко, 25-26.
- (71) *Ibid.*, 29-31.
- (72) *Ibid.*, 32.
- (73) *HM*, No.1223, 1.II.1918, 3; cf. 山内 『リユトヘルス』, 192-193.
- (74) Correspondence of MID, 10058-91-f/w.
- (75) *HM*, No.1224, 2.II.1918, 1.
- (76) *HM*, No.1225, 4.II.1918, 3.
- (77) Correspondence of MID, 10058-114-1.
- (78) Correspondence of MID, 10058-86-1; 山内 『リユトヘルス』, 184-185.
- (79) Correspondence of MID, 10058-114-1; 山内 『リユトヘルス』, 184-187.
- (80) *HM*, No.1227, 6.II.1918, 4.
- (81) *HM*, No.1226, 5.II.1918, 1.
- (82) *HM*, No.1226, 5.II.1918, 3.
- (83) *HM*, No.1232, 12.II.1918, 3.
- (84) “Brief of Department of Justice upon the status of Gdaly Gregory Weinstein under the Act of Congress, approved October 16, 1918,” Records of FBI, BS202600-70.
- (85) “Bolsheviki Decide to Run Labor Here,” *The New York Times*, Vol.67, No.21,927, 5.II.1918, 5.
- (86) “Ко всем русским революционным и профессиональным рабочим организациям города Нью-Йорка,” *HM*, No.1278, 6.IV.1918, 4.
- (87) *HM*, No.1350, 1.VII.1918, 3.

- (88) Н. Гурвич, “К расколу в Российской рабочей колоний в Нью-Йорке. (Образование двух Советов). Статья первая,” *HM*, No.1908 [同紙は1918年8月29日の1399号の「3」を「8」と見誤ったかで、次号は一気に1900号へ飛んで訂正されないままとなる], 9.IX.1918, 3.
- (89) Correspondence of MID, 10058-248.
- (90) Correspondence of MID, 10058-232-2.
- (91) Correspondence of MID, 10058-96.
- (92) Correspondence of MID, 10058-238; cf. 10110-1683-8.
- (93) Correspondence of MID, 10058-260-14; *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 865; Vol.2, 1355, 2004.
- (94) Records of FBI, BS202600-184; cf. Омельченко/Корф, 140. なおヘルダー編の書誌目録では、終刊を1919年7月31日と誤記されている。Hoerder, 125.
- (95) *HM*, No.1938, 10.X.1918, 3.
- (96) New York (State). Legislature. Joint Legislative Committee Investigating Seditious Activities [hereafter cited as Lusk Committee], Roll #L0027-1, New York State Archives and Records Administration, Albany, NY.
- (97) Correspondence of MID, 10110-853-41.
- (98) Correspondence of MID, 10110-853-42.
- (99) “К Российской Рабочий Колоний в Америке. (О созыве нью-йоркским Советом «общеколонияльного» съезда),” *HM*, No.2000, 14.XII.1918, 3.
- (100) *HM*, No.2009, 25.XII.1918, 4.
- (101) Correspondence of MID, 10058-241.
- (102) Correspondence of MID, 10058-260-14.
- (103) 山内『リュトヘルス』, 233-234.
- (104) *HM*, No.2017, 8.I.1919, 4; Speer’s Report, Records of FBI, OG325570/BS202600-184.
- (105) *HM*, No.2019, 10.I.1919, 3.
- (106) *HM*, No.2021, 13.I.1919, 2.
- (107) Л. Зубнов/Н. Козик, “Почем мы покинули съезд? (Заявление делегатов от левых с.-р.-ов),” *HM*, No.2020, 11.I.1919, 3.
- (108) *HM*, No.2018, 9.I.1919, 3.
- (109) Speer’s Report, Records of FBI, OG325570/BS202600-184.
- (110) Correspondence of MID, 10058-248-9; cf. 10058-248-10 & 13.
- (111) *Revolutionary Radicalism*, Part 1, Vol.1, 653.
- (112) Lusk Committee, Roll #L0038 (Reel 3, Box 3, file 5, Duplicate Microfilm of the Tamiment Library, New York).
- (113) Report of P-132 (New York City) on “Third Russian All-Colonial Convention of United States and Canada. Russian Professional Unions, and Association of Russian Trade Unions and

Educational Societies,” Records of FBI, BS202600-1217-23; “Resolutions of the Third All-Colonial Convention held march 6-9, 1921, in New York,” *ibid.*, BS202600-1217-5; cf. Correspondence of MID, 10110-1683-60.

- (114) 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク 移民の生活と労働の世界』(山川出版社, 1995), 228.
- (115) Г.Я. Тарле, *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.* (Москва, 1968), 67.
- (116) *Ibid.*, 66; Л.К. Мартенс, “Воспоминания о В.И. Ленине,” *Исторический архив*, 1958, No.5, 148.
- (117) Тарле, 66-67.
- (118) Г.Я. Тарле, *Российское зарубежье и родина* (Москва, 1993), 17 (ただし本書は未見で、Ручкин, Глава 3, 20/87から再引用).
- (119) Тарле, *Друзья страны Советов*, 61.
- (120) N. Carpenter, *Immigrants and Their Children 1920. A Study Based on Census Statistics Relative to the Foreign Born and the Native White of Foreign or Mixed Parentage* (Washington, 1927), 74-75, 97, 342.
- (121) R.L. Garis, *Immigration Restriction. A Study of the Opposition to and Regulation of Immigration into the United States* (New York, 1927), 227.